筑波大学第三学群国際総合学類

卒業論文

都市における「先住民」とアイデンティティ

—メキシコシティの事例から—

2004年1月

氏　　名：佐藤 亜希子

学籍番号：199901131

指導教官：関根久雄

目　次

第1章　序論 …… 1

1．研究目的 …… 1

2．研究方法 …… 2

3．メキシコにおける先住民 …… 3

(1) メキシコにおける人種概念 …… 3

(2) 先住民の定義 …… 4

第2章　メキシコシティと先住民 …… 6

1．メキシコシティの概要 …… 6

2．メキシコシティに居住する先住民 …… 7

(1) 統計的概要 …… 7

(2) 元来メキシコシティ内に共同体を持つ先住民 …… 9

(3) メキシコシティにおける移住者としての先住民 …… 12

3．非先住民による、都市における先住民への対応 …… 17

(1) 差別・偏見・ステレオタイプ …… 17

(2) メキシコの先住民政策 …… 20

第3章　メキシコシティへ移住した先住民のアイデンティティ …… 24

1．脱先住民化・メスティソ化 …… 24

2．先住民性を維持しながらも主張しない人々 …… 25

3．先住民性を主張する人々 …… 28

(1) アイデンティティの「発見」あるいは「再発見」 …… 28

(2) 生活手段としての「先住民」 …… 30

(3) 先住民運動・先住民組織 …… 32

第4章　ラベルとしての「先住民」 …… 37

第5章　結論 …… 44

図目次

図１　メキシコ地図 ---------- 5
図２　メキシコシティの地区名 ---------- 5

第1章　序論

1．研究目的

本稿は、メキシコの首都メキシコシティに地方からの移住者として居住する先住民のうち、とくに先住民性を主張する者のアイデンティティを分析対象として、その主張の背景を明らかにすることを目的とする。

メキシコには現在、62 の先住民言語が存在する(1)。本章第 3 節で詳しく述べるが、メキシコにおける人種規定の概念とは、生物学上の区分ではなく、文化的相違や本人のアイデンティティに深くかかわる。すなわち肌の色や「血」から客観的に判断できるものではない。先住民の定義に明確なコンセンサスがない以上、メキシコの先住民人口を正確に把握することは不可能である。メキシコの全国地理・情報統計庁（INEGI）によって、2000 年に実施された人口と住居に関する国勢調査によると、自らを先住民であると申告した者はおよそ 530 万人であった[INEGI 2000:25]。この数字は、あくまで先住民自身による申告であることから、研究者のなかには、実際の先住民人口をおよそ 800 万人だと見積もる者もいる[黒田　1995:202]。先住民の大部分は、先祖から受け継いだ土地を基盤に、地方で共同体を形成して生活している。首都メキシコシティを含む都市部への移住は、主に 1940 年代から始まった現象であるが(2)、特に近年、メキシコ経済が世界と広くかかわりを持ち、市場経済が国内に浸透してゆく過程で、その規模は急激に拡大している。

メキシコ社会は、大まかに見て、10%の白人、80%のメスティソ（白人と先住民の混血）、10%の先住民によって構成されている[高山　1987:420]。第 2 章で詳しく述べるが、このうち非先住民の間には、先住民に対する根強い差別や偏見が存在している。

一方、先に述べたように、メキシコにおいて人種とは、文化的・社会的側面によって規定されるものである。それゆえ、文化的社会的変化によって先住民が「脱先住民化」し、メスティソとなることは可能である。実際に、これは都市部においては珍しい現象ではない。そうすることによって、非先住民による差別や偏見から逃れることができ、社会的・経済的に暮らしやすくなるからである。しかしながら、メキシコシティにおいては、それでもあえて先住民性を主張して生きる人々がいる。メキシコにおける先住民のアイデンティティの表明は、近年の多文化主義政策(3)による非先住民

の先住民に対する態度の軟化、メキシコ政府の先住民政策の改善・充実などを理由に、先住民がその出自を隠す必要がなくなったために増加している。しかし、理由はそれだけなのであろうか。先住民としてのアイデンティティは、単にそれを隠蔽する必要がなくなったためにその表明が増加したのだろうか。彼らが都市において先住民性を主張するとき、都市民の大多数を占める非先住民や彼らによって構成される国民国家との関係、あるいはその影響はどのようなものなのだろうか。本稿では、「非先住民に向けられた『先住民性』」を分析概念として、都市において、先住民としてのアイデンティティが主張される背景を分析する。ここでの「先住民性」とは、「先住民であること」と、そのことを構成するさまざまな性質を指す。

なお、メキシコシティには、元々そこに共同体を持って定住してきた先住民がおよそ30万人存在する[Bazúa 1998:2]。彼らは生まれながらにして都市部に居住し、先住民のアイデンティティの根幹を成す共同体に、民族集団を形成している。このような人々は本稿の主要な研究の対象外とし、移住者との比較に用いるのみとする。

本稿の構成を述べると、第1章である本章では、以下、メキシコにおける人種概念と、それを踏まえた「先住民」という概念を明確にする。第2章では、メキシコシティに居住する先住民の姿を明らかにする。メキシコシティの先住民について、統計資料に基づく概要を述べ、さらに元々メキシコシティ内に共同体を持って定住している先住民と、地方からメキシコシティに移住した先住民、それぞれの特徴を述べる。また、非先住民側からの先住民への対応や反応、すなわち先住民政策や差別についても検証する。続く第3章では、メキシコシティへ移住した先住民のアイデンティティとその背景を分析する。第4章ではこれに考察を加え、第5章をもって結論とする。

2．研究方法

筆者は、2002年6月から2003年2月までの約9ヶ月間メキシコシティに滞在し、その間、現地の先住民についての調査を行った。本稿では、メキシコシティに移住した先住民と、元々メキシコシティの共同体に居住する先住民に対して行ったインタビューを資料として用いる。インタビューはスペイン語で行った。また、日本語あるいはスペイン語で書かれたメキシコの先住民に関する先行研究を用いて補足を行った。メキシコシティやメキシコの先住民についてのデータは、メキシコ政府関係のウェブサイトを参考にした。

なお、本稿で使用する「先住民」という用語は、スペイン語で「土着の人」を意味する「インディヘナ」(indígena) に相当する。かつて主流であった「インディオ」(indio) という用語は、日本語で「原住民」に相当する。この言葉は、差別的だとの理由で使われることが少なくなった。しかし最近になって、問題の本質を見極めるために、あえて再びこの用語を使用する例も見られるようになった。筆者は本稿において「先住民」という用語を用いるが、研究者や文献が書かれた時代によっては、「インディオ」や「原住民」という言葉が使われることもある。本稿の引用文中にも、たびたびそれらの言葉が登場するが、いずれの語も同一の対象を指し示すものとする。

3．メキシコにおける先住民

(1) メキシコにおける人種概念

メキシコの先住民について述べる際に、まず念頭に置かなければならないのは、メキシコにおける人種概念である。メキシコでは、人種は生物学的要素（すなわち「血」）のみではなく、文化的・社会的要素も考慮して決定される。メキシコにおいて、人種は、言語や生活習慣、社会的地位や本人のアイデンティティに深く関係する。これはメキシコのみならず、他のラテンアメリカ諸国においても共通の概念である。

例えば、メスティソ（mestizo）は本来白人と先住民との混血の人々を指す言葉であったが、現在では「文化的、社会的に白人支配層と先住民の中間に位するもの、さらには国民社会の多数派を構成するもの、国民文化の担い手の意味をも持つようになった」[中川 1995:180-181]。そのため、一般に「先住民」と呼ばれるモンゴロイド系の身体的特徴を持つ人で、それまでの人生を先住民として生きてきた人でも、言語や生活習慣などの文化的変化によってメスティソとなることは可能であるし、メスティソのうちモンゴロイド系の身体的特徴の強い人と先住民とを、外見的に区別することは不可能である。黒田は、「先住民からメスティーソに移るには、必ずしも民族的に混血しなくとも、文化的に移行すればメスティーソになる」[黒田 1996:41]と述べ、実際に年に数%の「元先住民」がメスティソ化していると報告する[黒田 1987:71]。「都市にきて服装を変え、スペイン語を話せば、もう誰もインディオとは呼ばない」[恒川 1991:71]のである。また Montemayor は、インディヘニスモ[(4)]以前、「混血(mestizaje)は、2 種類の人々による文化的・社会的融合の、調和や均衡が取れた結果ではなく、西洋あるいはクオリージョ[(5)]のやり方へ先住民が合併した結果であった。メスティソとは、

先住民であることを放棄した人々であった」[Montemayor 2000:82]としているが、これは現在にも言えることである。「メスティソ化」については後に述べるが、ともかくこのように、メキシコにおける「人種」とは絶対的なものではなく、移動可能で流動的なものである。

(2) 先住民の定義

以上のような、人種概念のもつ社会的・文化的要素や、「人種」の流動性を踏まえると、先住民とはどのように定義されるのだろうか。非先住民から先住民を区別する要素として、モンゴロイド的形質、言語、衣装、食事、宇宙観、経済、政治、社会、文化、法、統治制度、土地保有制度、家族構造、婚姻と親族関係、文化の再生産のための空間としての共同体、農耕・牧畜・手工業などの生産習慣、アイデンティティなどが挙げられる[スタベンハーゲン 1981:94; 黒田 1987:71; Montemayor 2000:87-88]。しかし、人やモノの移動が盛んになり、情報の伝達速度・範囲がかつてなく高まり、市場経済やメスティソの支える国民文化が浸透した現在では、これらすべての基準を満たす「純粋な先住民」は多くないであろう。そのため、長年にわたって、「もっとも重要なのは言語学上の基準である」[スタベンハーゲン 1981:93]と考えられてきたのであるが、この基準もすでに通用しなくなっていることを示唆する報告が、メキシコの全国地理・情報統計庁（Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática，以下INEGI）から出されている。これによると、2000年に実施された人口と住居に関する国勢調査では、5歳以上の何らかの先住民言語の話し手が630万人記録された。これに、家長あるいはその配偶者が何らかの先住民言語を話す、130万人の0歳から4歳の子供を加えると、全体の数字は760万人になる。この調査に、自らを先住民だと認識する人は530万人記録され、そのうち110万人（21%）は、どの先住民言語も話さない[INEGI 2000:25]。つまり、5歳以上の630万人の先住民言語の話し手のうち、420万人だけが自らを先住民であると認識しており、210万人（全人口の2.5%であり、先住民言語の話し手のうちの31.7%）が、自らを先住民であると認識していないのである。これは、前述したメスティソ化の結果であろう。

それゆえ、現在では「本質的な意味で先住民を先住民として同定するものは、外見上の文化的特徴の有無ではなくて、各人のアイデンティティである」[黒田 1996:43]と言わざるをえない。つまり、自らを先住民だと認識している人が先住民なのである。

図１　メキシコ地図

([世界の大都市③メキシコシティ　1987]より)

図２　メキシコシティの地区名

([メキシコの経済発展と都市化 1994]より)

第2章　メキシコシティと先住民

1．メキシコシティの概要

メキシコの首都メキシコシティ（la Ciudad de México）は、北緯 19.36 度から 19.3 度、西経 98.57 度から 99.22 度に位置する。東西約 40km、南北約 50km の面積は 1,489.86 km²で、これはメキシコの領土全体の 0.1%を占める[(6)]。また、メキシコ盆地の中に位置する、標高約 2,240m の高原都市である。

メキシコシティは、連邦区（Distrito Federal）とも呼ばれ、デレガシオン（delegación）と呼ばれる 16 の区からなる。連邦区内の人口増加とそれにともなう過密化の進行により、1950 年頃から、隣接するメキシコ州への人口移動が始まった。その結果として形成された、メキシコ州の 11 の地区を含む都市圏は、メキシコシティ大都市圏（Zona Metropolitana de la Ciudad de México）と呼ばれる[細野 1994b:28]が、「メキシコシティ」という言葉が用いられるとき、場合によってはこの大都市圏を指すこともある。2000 年における連邦特別区の人口は 860 万 5,239 人で、メキシコシティ大都市圏の人口は 1,515 万 9,386 人であった[(7)]。連邦区はひとつの行政区分であり、メキシコ州のうちメキシコシティ大都市圏に属する 11 の地区は、その他の 111 の地区とともに、メキシコ州の行政下に置かれる。メキシコ政府によって行われる一連の統計調査は、行政区分単位で行われるので、資料の豊富さから、本稿では連邦区をメキシコシティとして扱う。

ラテンアメリカの他の大都市同様、メキシコシティにおいても、過度の人口集中が進行している。1950 年に約 300 万人だった人口は、60 年には 480 万人、70 年には 690 万人、80 年には 800 万人、90 年には 820 万人と増加の一途をたどり、2000 年には、前述の通り、860 万人に達した[(8)]。これは、人口の自然増加のみによるものではなく、大部分は他の都市や地方から移住者してきた者の増加の結果である。1940 年ごろより始まった工業化の進展とともに、メキシコシティには多くのモノや資本が集中し、これが他の都市や地方の人口を吸収してきた。しかも、同時期から起こった全国的な人口増加によって、耕作すべき土地をなくした農村の労働力が雇用を求めて都市へ移住を開始し、メキシコシティのいっそうの都市化を招くこととなった[細野 1994a:2-3]。

このように、メキシコシティからの吸引要因だけでなく、地方からの強力な排出要

因によって莫大な人口を抱えることとなったため、メキシコシティでは、インフラストラクチャーの未整備が深刻な問題となっている。公共交通機関や道路の不足、上水道と下水道の未整備によって居住地としての環境は悪化し、最貧困層に位置する人々は、特に条件の悪い土地に密集して住まざるをえなくなっている。廃材によって建てられた住居からなるスラム街が不法に占拠された土地に形成され、安全や衛生の面からも問題となっている。このような過密状態と、そこから発生する住環境の劣悪さは、メキシコシティの最大の特徴であるといえる。次節では、このようなメキシコシティに居住する先住民の一般的状況について述べる。

2．メキシコシティに居住する先住民

(1) 統計的概要

前述したように、メキシコシティの先住民には、元々その地にある共同体に定住している者と、地方あるいは他の都市から移住してきた者がいる。それぞれの特徴については後に述べるとして、ここでは、先行研究や INEGI のデータに基づいて、メキシコシティの先住民全体の統計的な概要を把握する。

Bazúa は、先住民人口について、元来メキシコシティ内に共同体を持つ先住民、すなわち生まれながらに都市民である先住民は、先住民言語を話さない割合が高いとして、言語学上の基準に頼らない独自の調査を行った。その結果、メキシコシティには 51 万 9,638 人の先住民人口が存在すると報告している[Bazúa 1998:2]。これは、全市民の約 6%に相当する。

一方、INEGI によって 2000 年に実施された、人口と住居に関する国勢調査によると、メキシコシティにおける、5 歳以上の何らかの先住民言語の話し手は 14 万 1,710 人であった。このように、何をもって先住民とみなすかによって数字は大幅に変化するのであるが、ここでは、前出の INEGI による国勢調査のデータをいくつか挙げ、メキシコ先住民全体の中での、メキシコシティの先住民の特徴を探る。

1) 人口

先に述べたように、INEGI によって報告された、メキシコシティの 5 歳以上の先住民言語の話し手は 14 万 1,719 人であるが、これは、メキシコ全土における先住民言語の話し手 604 万 4,547 人のうちの 2.3%である。また、メキシコシティの 5 歳以上の人口 773 万 8,307 人のうちの 1.8%を占める。このうち、メキシコの公用語であるスペイ

ン語を話す人は97.1%にのぼり、全国で最も高い数字である。メキシコ全土では、先住民言語の話し手は全人口の7.2%であり、メキシコシティの数字はメキシコの全32州のうち9番目に低い。また、この先住民言語の話し手は、男女別に見ると、男性6万3,592人、女性7万8,118人と女性が圧倒的に多い。

2) 子ども

メキシコシティにおいて、先住民言語を話す12歳以上の女子が持つ、生きている子どもの数の平均は2.3人であり、これは全国で最も低い。彼女たちの子どものうち、死亡した者の割合は11.4%で、全国で2番目に低い数字である。また、先住民言語の話し手のうち、5歳から14歳の割合が全国で最低の6.0%となっている。これらのことは、都市の先住民のなかで少子化が進んでいることを示している。

3) 教育

先住民言語を話す6歳から14歳の児童の就学率は、男子が84.8%で全国32州のうち12位、女子が73.4%で20位となっている。女子は、全国平均の81.7%を下回る数字である。スペイン語を話す割合が高く、言語の問題はないにもかかわらず女子の就学率が低いこと、また上で述べたように女性の人口が多いことから、先住民女性は地方で得られない職を求めて都市へ移住する傾向が強いと解釈できる。15歳以上の識字率は87.8%と全国で1位であることと比較して、6歳から14歳の識字率が92.7%と全国3位にとどまっていることも、現在の就学率の低さに起因するものであろう。しかし、15歳以上の先住民言語の話し手の平均就学年数は6.4年であり、男女ともに全国で最も高い。

4) 労働

12歳以上の先住民言語の話し手で、何らかの労働活動に従事している人のうち、雇用されて給与を支払われている人の割合は76.6%で、全国で4番目に高い。逆に、労働活動に参加しているが現金収入を得ていない人、あるいは家族の持つ土地で働いている人の割合は1.0%で、全国で2番目に低い。同じく12歳以上で、専業主夫/主婦の割合は18.3%と、全国で4番目に低い。ここから、「都市＝現金収入」という図式が導かれる。また、12歳以上で何らかの労働活動に従事している人の割合は、男性が

89.4%で全国 4 位、女性が 57.9%で全国 2 位となっている[9]。上で述べた、女子の就学率の低さの要因であろう。

以上のデータから導かれる、メキシコシティにおける先住民の特徴は、以下の通りである。スペイン語を話す割合が高く、他の州の先住民と比較して少子化が進んでいる。就学率は高いとはいえないが、スペイン語を話す割合が高いこともあり、識字率は高い。女子は男子と比較して、若年期に教育よりも労働に従事する傾向にある。労働活動に参加している人は現金収入を得る割合が高い。これらの特徴のうち、労働に関するもののいくつかは、現金収入を求めて都市へ移住する先住民によって形成されていると推測される。次に、元々メキシコシティ内に共同体を持って生活している先住民について述べる。

(2) メキシコシティ内に共同体を持つ先住民

メキシコにおいて、先住民は一般的に共同体を構成して生活してきた。この共同体は、ムニシピオ（munucipio）と呼ばれ、それぞれの先住民言語はひとつあるいは複数のムニシピオを内包する。共同体は、同じ先住民言語の方言、市場、生業、衣装、高い内婚率、同一の行政・宗教組織、共有地などを有する。植民地時代以降、この共同体システムは微妙に変化してきたが、現代まで一定の要素は維持されてきている。共同体は、先住民にとって生活の基盤であり、アイデンティティのよりどころである[黒田 1995:206-207][10]。

Bazúa は、元々メキシコシティに共同体を持つ先住民は、現在 31 万 6,604 人であると報告している[Bazúa 1998:2]。彼らは、スペイン人入植以前からこの地で生活していた人々の子孫であり、主にメキシコシティの南、ミルパ・アルタ（Milpa Alta）、ソチミルコ（Xochimilco）、トラルパン（Tlalpan）、トラワック（Tlahuac）や、規模はより小さくなるが、マグダレナ・コントレラス（Magdalena Contreras）、クアヒマルパ（Cuajimalpa）、アルバロ・オブレゴン（Alvaro Obregón）に、45 の共同体を形成して居住している[11]。

彼らは、スペイン人の入植以来、さまざまな形で圧力を受けてきた。植民地時代には、彼らの文化は野蛮なものとして捉えられたが、「原住民社会の労働力を富の源泉として必要としたスペイン人植民者たちは、原住民社会を破壊し去ることはなかった」[落合　1984:237]ために、その文化が消滅することはなかった。独立（1821 年）以後

の自由主義政策や、メキシコ革命（1910 年）以後の都市化の圧力にともない、共同体の基盤となる土地領域は減少したが、彼ら独自の文化のうち現在まで受け継がれているものもある。非先住民社会の同化の圧力に耐えて保持されてきた土地や、そこで築かれる文化やさまざまな社会制度こそが、現代において彼らのアイデンティティの根幹を成すものであるといえる。スペイン人入植後の先住民社会の歴史は、土地を守るための戦いによって位置づけられる側面もある(12)。

しかしながら、このアイデンティティは、時に隠蔽される。特に 1950 年代から 80 年代にかけて、自らが先住民の出自であることがしばしば隠された。近代的な都市の成長にともなって、非先住民だけでなく、先住民自身によっても、先住民であることが、遅れていることや劣っていることだとみなされたためである(13)。

また、20 年ほど前から、前に挙げた先住民共同体が多く存在する地区の先住民人口が、急激に増加している。これは、セントロ（Centro）と呼ばれるメキシコシティ中心地区から先住民が流出したために起こった現象である。そのため、これらの地区の土地は細分化され、先住民の土地を保護するための政策がないままに、無秩序に進行する都市の巨大化を助長する結果となった。土地が買収され、商業目的で利用されたり、転売されたりするようになったのである[Yanes 2002]。さらに、土地の境界線をめぐって先住民共同体の間に争いが起こり、自らの土地を失った共同体もある。

しかし、1990 年代に始まった、世界的な先住民運動の潮流に乗って、メキシコにおいても先住民の土地の回復運動が盛んになり始めた。また、前述の土地流出を踏まえて、土地管理に関する危機感も増してきており、状況は幾分か好転してきているようである。

筆者は、2002 年 10 月に、このような先住民共同体のひとつを訪れた。この共同体は、メキシコシティの中心部からやや離れた郊外にあり、その町並みに溶け込んでいた。共同体の内部には、家々とともに畑やビニールハウスが広がり、それらの水源となる水路が引かれている。メキシコシティは、巨大な湖の上に築かれた都市であるが、川といえるほどの水流を持たないこの共同体の水路は、その名残だという。非先住民や外国人が、先住民やその共同体について語るとき、「自然と共存し、伝統的な生活を送る先住民たち」といった、ある種美化されたイメージが発信されることがある。この傾向は、とくにメディアや観光産業において顕著である。しかしこの共同体は、そのようなステレオタイプからは程遠い状況であった。工業生産された衣服を身につけ

た人々はスペイン語を話し、訪問した家庭にも、筆者の知る複数のメスティソ家庭と比較して、特筆すべき相違は見当たらなかった。水路や通りには、空き缶やスナック菓子の袋などのごみが散乱し、これも典型的なメキシコの姿であった。つまり一見したところ、そこは、非先住民の住む他の郊外地区と何ら変わらなかったのである。

しかし、その共同体のリーダーや住民に話を聞くと、いくつかの点で先住民性が維持されているようであった。そのひとつが、農法である。野菜や花の栽培方法は、祖先から受け継いだ、独特なものであるという。現在のような都市が築かれる以前には、大部分が湖であったこの土地では、特別に工夫された農法が存在し、現在でもその方法が使用されているのだという。ある男性は、「この土地のことは、何百年も前から住んでいた我々の祖先と我々が一番よく知っている」と話していた。しかしながら、現在の農法は、祖先の時代に行われていたものとは異なり、当時の優れた点を生かしながら、改良が加えられた結果である。この地の特産である花の出荷を常に安定させるためのビニールハウスもそのひとつであるし、以前は水路が届かなかった畑にも数年がかりで人工的な水路が引かれた。また、この共同体出身で、大学で農業の研究に従事した男性は、数年前からある外資系のレストランと契約して、通常の3倍の値段で売れるという特別な種類のレタスを栽培し、その後も新たな試みを続けているという。それでも、「ここの農業の基礎は、祖先から受け継いだもので、それがなかったらどうにもならない」と、この共同体のリーダーは強調する。伝統の上に築かれた新たな取り組みによる農業の発展は、共同体の存続のための手段として機能しているようである。

また、祖先から伝えられた祭り（fiesta）も続けられており、共同体のリーダーは「これは、我々が我々であり続けるために非常に大事なことだ」と話す。年間を通じて行われるこのような祭りには、共同体のほとんどの住民が参加するという。共同体には、独自の行政組織のほかに祭りのための組織があり、住民は、この組織にしたがって祭りに参加する。その方法はさまざまで、歌や踊りの披露、協会や通りの飾り付け、飲食物の準備、金銭的な協力などがある。このようなプロセスを通じて、祭りは、古くから続くアイデンティティと、共同体内部での結合を改めて強化する役割を担う。都市の内部にあり、非先住民によって担われる「メキシコ文化」との接触の機会が多く、ともすればそれに飲み込まれそうにもなるメキシコシティの先住民共同体にとって、人々のアイデンティティに訴えかけるような行事は、特に大きな意味を持つのであろ

う。

このように、元々メキシコシティ内に共同体を持つ先住民の特徴は、都市の内部、すなわち巨大な非先住民社会の内部にあり、幾多の困難に直面しながらもそのアイデンティティを保ち続けていることであるといえよう。都市の内部に共同体を持つということは、常に都市の拡大と同化の圧力に耐えなければならないことを意味する。しかし、強大な圧力を目前にすることは、かえって共同体の住民のアイデンティティを高め得る。また、共同体を離れることなく現金収入やさまざまな公共サービスにアクセスすることができ、移住者を生みにくいので、結果的に共同体を維持しやすいとも解釈できる。

アイデンティティの維持の背景には、伝統的農法を実践し、祭りを行い、そしてアイデンティティを共有する人々が住み続けることのできる土地の存在が不可欠である。先住民共同体や共有地は、未だ法的に十分に保護されているとはいえない状況にある。また、森などの自然資源も年々失われつつある。つまり、メキシコシティに共同体を持つ先住民のアイデンティティの維持は、先住民の権利に加え、土地や資源の保護や維持によるところが大きいといえよう。次項では、地方からメキシコシティに移住した先住民の概況を述べる。

(3) メキシコシティにおける移住者としての先住民

1) 歴史と要因

メキシコシティをはじめとする都市への先住民の移住は、主に 1940 年代に始まった。これは 1940 年代に始まる工業化の進展とともに財とサービスが都市部に集中し、それとともに地方と都市の生活水準の差が拡大したこと、また、一次産品の輸入の割合が増加し、地方農村の生活が立ち行かなくなったことによる。さらに、近年メキシコは新自由主義経済政策をとっており、それに取り残された地方の先住民が都市へ移住する現象は拡大を続けている。

全国先住民庁（Instituto Nacional Indigenista、INI と略される）[14]は、現在の先住民の移住の主な要因を 5 つに分類する。1 つ目は、環境的な要因である。土地の生産性の低さ、天災、商業作物の栽培による土地のやせなどがこれに当たる。また、農閑期に一時的に都市へ移住する人々も多い。2 つ目は、土地問題、すなわち土地の絶対的な不足やダム・道路・工業プラントの建設などである。3 つ目は商業作物の価格の低

下である。コーヒーやリュウゼツラン、タバコ、カカオなどの農産物の価格の低下とともに、ヤシや木材など、民芸品の原料への需要も低下している。4 つ目は、移動と追放である。これは、開拓を行うメスティソへの土地の割り当てや、先住民共同体間での武力紛争、あるいは武力による土地の占有によって、元の土地の所有者やその家族が土地を追われることである。5 つ目は、社会的要因である。これは、サービスの不足や人口増加、宗教的対立なども含まれる(15)。

ここから読み取れるのは、先住民の都市への移住は、都市からのプル要因ではなく、地方からのプッシュ要因が主であるということである。また、その要因の多くが、土地の量的あるいは質的不足による経済的困難にあることも明らかである。以下では、そのような状態でメキシコシティへ移住した先住民の生活実態を探る。

2) 人口と住居

メキシコシティには、先住民の移住者はどのくらい存在するのだろうか。すでに述べたとおり、正確な先住民人口の把握は不可能である。不完全な指標であることは承知の上で、大まかな像をつかむために、ひとつの指標として言語を取り上げる。メキシコ政府全国地理・情報統計庁（INEGI）は、メキシコシティには、何らかの先住民言語を話す移住者が 10 万 890 人おり、世帯主かその配偶者が何らかの先住民言語を話す家庭の構成員は 21 万 8,739 人いると報告している(16)。

彼らは、メキシコシティ内に共同体を持つ先住民のように、いくつかの区に集中して居住する傾向がある。移住者の場合は、クワウテモック（Cuauhtémoc）、ベヌスティアーノ・カレンサ（Venustiano Carranza）、イスタパラパ（Iztapalapa）、コヨアカン（Coyoacán）、イスタカルコ（Iztacalco）、グスターボ・A・マデロ（Gustavo A.Madero）といった地区が、これにあたる[Yanes 2002]。これは、彼らがまず家族や親戚、同じ共同体の出身者などを頼って都市へ移住することが多いからである。人口過密のため、メキシコシティの住環境は一般的に劣悪であるが、彼らの場合も例外ではない。メキシコシティへ移住した先住民の大半は、深刻な住宅問題に直面している。彼らの多くは、不法に建設された住居やスラム街に住み、特にクワウテモック地区では、高い密集状態にあると報告される(17)。このような住居の住民は、建築の質の劣悪さ、法的な保護の欠如、基本的なサービスへのアクセスの困難さなどによって、常に危険で不安定な状態に置かれている。

また、メキシコシティに移住した先住民の間では、家族や親戚、出身共同体の構成員同士の絆は一般的に強固である[黒田 1996:35-36]。これは、外部の困難な環境からの防御や、共同体での関係の再生産の場であり、都市での生活のための重要な戦略であるといえよう。

3) 経済活動

ここでは、メキシコシティへ移住する先住民の経済活動の傾向を簡単に述べることとする。

非先住民による、先住民に対する労働評価は、概して低い。これは、非先住民のもつ、先住民に対しての「能力が低く、賃金労働のための十分な訓練を受けていない」といったステレオタイプに起因するものである。時には、これに「間抜け、のろま、無知」などが加わることもある[Oehmichen 2003]。そのため、先住民の移住者は、都市において極めて悪条件での労働に従事することが多い。彼らの大部分は、インフォーマルセクターに参入することになる。すなわち、危険で低報酬で一時的な仕事、残業手当は支払われず、社会保障システムへのアクセスも持たず、適切な法規制を当てにできない仕事[Castellanos 2001:387] (18)に就くのである。その代表的なものは、男性の場合は建築現場の作業員、女性の場合は家政婦、男女ともに共通するのが露天商である。また、物乞いに頼る人々もいる。学齢期の子供がこれらの経済活動に参加することも珍しくなく、特に露店では、子供が親あるいは年上の兄弟を手伝う姿がよく見られる。ただし、これらの経済活動は先住民に限られたものではなく、大部分は、より人口の多いメスティソによって担われている。問題は、先住民であることを理由に、彼らが職業を選択できない状況にあるということである。また、メスティソと比較すると少数派であるにもかかわらず、先住民がこのような社会的・経済的地位の低い労働に従事することが、非先住民の間での、先住民に対する否定的な偏見やステレオタイプの再生産の一因となっていることも指摘できよう。

彼らが職を得るには、いくつかの方法がある。メキシコシティに4つある長距離バスターミナルでは、建築などの肉体労働に従事すべく首都を目指してきた先住民と、彼らのような労働力を必要とする人々が出会い、契約を交わされることがよくある。他の方法としては、家族や親族、同じ共同体出身の者とのネットワークも頻繁に活用される。もっとも、この方法は先住民・非先住民を問わずメキシコで一般的な方法で

あり、特にインフォーマルセクターでは、その可能性はより高まるであろう。

4) 教育

教育面においても、先住民の移住者は恵まれた環境には置かれていない。先住民の移住者の子供たちは、かなりの割合で初等教育あるいは就学前教育を享受できずにいる。また、移住のために学校教育を途中で放棄しなければならない子供たちもいる。たとえ学校に通っていても、先住民の子供たちの留年率は、全国平均と比較して高い数字を示しており、義務教育を修了する割合も低い(19)。

このような状況にはいくつかの要因がある。そのひとつは、経済的問題である。義務教育は無償とはいえ、教科書代などの教育費の負担が重いことに加えて、経済的に困難な親たちにとって、子どもは、家計を支える重要な稼ぎ手のひとりとなりうるのである。また、子供にはよい教育をと望みながらも、経済的事情のために断念せざるを得ないこともある。

その他の大きな要因は、先住民の子どもたちにとっての教育環境の未整備である。学校では単一文化教育がなされ、そこで使われる教科書には、先住民は、間接的に経済発展と国民文化に統合されるべき存在として描かれている[Castellanos 2001:386]。学校教育は、スペイン人入植以前の「我々の祖先」としての先住民の姿は描いても、現代の先住民については積極的な語り口を持たないのである。また、先住民人口の多い地方では2言語教育が試みられてきたが、62もの先住民言語のほとんどの話し手が居住するメキシコシティでは、それも実施されてはいない。そのため、スペイン語が流暢でない子どもたちは、授業についていけないだけでなく、しばしば劣等感や疎外感を感じることとなる。

さらに学校では、先住民の子供たちは、しばしば非先住民の子どもたちからの差別やいじめ、からかいの対象となる。そのため、先住民の子どもたちは、時として同郷の子どもたちだけで閉鎖的な人間関係を構築し、非先住民の子どもたちとは友人関係を築かない傾向にある[Oehmichen 2003]。もし学校に同郷の子どもたちがいない場合、先住民の子どもは孤立し、学校教育に消極的になることも予想できる。都市での教育環境は、先住民の子どもたちにとって、様々な点で不十分であり、過酷なものであるといえよう。

5) 保健衛生・公共サービス

先住民は、全国平均よりも高い出生率と乳幼児死亡率を記録しており、また、平均寿命は全国平均よりも短い[20]。この現象は、メキシコシティにおいても同様である。その背景には、先住民の置かれた貧困状態と、公共サービスへのアクセスの困難さが存在する。

先に述べた劣悪な住環境では、生活に必要な最も基本的なサービスが欠如している場合が多い。さらに、国民として当然保障されるべき権利も、先住民の移住者は享受しきれているとはいえない。その理由は、公共サービスの多くが彼らの文化的枠組みの外にあることと、都市における周囲の環境が、敵対的なものであることである。移住者である彼らには、どのようなサービスがどこで受けられるのかといった情報が正確に把握できないことがあり、特にスペイン語が流暢でない場合はなおさらである。また、病院での医療サービスは、完全に西洋的近代文化に基づいており、先住民が長い間培ってきた医療法は、非科学的な迷信だという扱いを受ける。公共の場での、このような非先住民の敵対的な視線にさらされ続けてきた人々の中には、サービスを放棄する者もいる。先住民に対する適切な形でのサービスの提供と、それにアクセス可能な環境の整備が性急な課題である。

6) 女性

先住民の移住者の中で、より大きな負担を受けているのが女性である。一般的に、先住民の間では、男性のほうがスペイン語を流暢に話す割合が高い[21]。地方においても、男性のほうが長期間の学校教育を受けたり、共同体の外の世界とかかわったりすることが多いからである。しかしながら、すでに述べたように、メキシコシティの先住民の人口は、女性のほうが圧倒的に多い。これは、現金収入を必要とする場合に、男性は地方にいながらにして農作業などに雇用されうるが、女性には就くべき職がないことが原因と考えられる。実際に、都市で先住民の女性が従事できるのは主にサービス業であり、地方では大きな需要は見込めない。

都市部においては、先住民女性に対する家政婦としての需要は大きい。なぜなら、メキシコにおいて、中流以上の家庭で家政婦を雇うことが一般的であるだけでなく、農村出身の彼女たちは、働き者であり、低賃金でメスティソ女性の倍の仕事をするとみなされているからである。一般に彼女たちは、「従順」である。スペイン語が流暢で

はない確率が高く、識字率は低く、労使関係の知識に長けておらず、一時的な移住による季節労働の場合には、社会的な手当てを支払わなくてもよいからである[22]。

前述したように、露天商も彼女たちの現金収入を得るための一般的な手段である。露天商は家政婦と違い、子ども連れでも可能であり、住み込みの必要もない。ただし、露店に子どもを連れて行く、あるいは子どもをそこで働かせることで、学校教育の機会を放棄することになる。先住民女性による露店では、主に陶器や人形などの「先住民的」な手工芸品や、伝統的な菓子などが売られる。

また都市部では、先住民の少女は重要な労働力である。彼女たちは、工場などにおける安い労働力として、需要が高い。学齢期にある女性たちは、すなわち十分な学校教育を受けておらず、都市における労働のための技術を持っていないため、搾取されがちである。しかし、搾取されたとしても、他に現金収入の見込みがないため、働き続けるしかないのが現状である。

このような労働は、長時間であるわりに低賃金であり、効率は低い。このような低報酬の状態から抜け出すためのひとつの手段が、売春である。正確なデータは入手できなかったが、家政婦斡旋所や工場などの中には、売春組織とつながりを持っているものもあり、これが、先住民女性が売春へ身を投じるひとつのルートとなっている[23]。別のルートとしては、マフィアや売春組織が先住民の少女を誘拐したり、時には家族から「買う」ケースもある。

いずれにせよ、先住民女性の移住者は、一般的に男性よりも困難な状況に置かれている。その上、女性であるがゆえに配偶者から暴力を受けたり、父親のない子どもを抱えたりするなどといった状況が加わることもまれではない。メキシコシティで見られる、物乞いをする先住民のうち、ほとんどは女性である。周縁化された先住民の間で、更なる周縁化が進んでいるのである。

以上、6つの側面から、メキシコシティへ移住した先住民の特徴を述べた。彼らは、さまざまな点で苦境に立たされている。その背景には、制度や法の未整備や、彼らの社会経済階層の低さとともに、非先住民の、先住民に対する圧倒的に否定的な見方が存在する。次項では、非先住民による、都市における先住民への対応を検証する。

3．非先住民による、都市における先住民への対応

(1) 差別・偏見・ステレオタイプ

非先住民の間には、先住民に対する根強い差別や偏見が存在する。また、先住民に対するステレオタイプも形成されている。これは、日常生活のさまざまな場面に、さまざまな形で表われる。

Oehmichen は、「インディオ」「インディヘナ」という言葉が何を意味するか、というメキシコシティの非先住民の人々を対象にした調査を行った。その結果、「田舎の人々、文化のない人々、伝統を持つ人々、ここ（都市）の出身ではない人々、教養のない人々、汚い人々、土着、惨め、周縁、我々の祖先、酔っ払い、働く意志のない人々、子どもを搾取する人々、無知、従順、家政婦」といった回答が現われた[Oehmichen 2003]。否定的な表現が圧倒的である。この中から、とくに「田舎の人々、ここ（都市）の出身ではない人々、我々の祖先」といった回答に注目したい。メキシコシティには、およそ 50 万人の先住民が存在するにもかかわらず、ここから読み取れるのは、先住民を現代の都市民として認めない姿勢である。先住民を、田舎や過去にいる人々であって、現在この場所で共存している都市民ではないとみなしている。すなわち、都市の先住民は「見えない存在、ここにいるべきでない存在」なのである。

それ故に、先住民はしばしば都市において、排斥の対象となる。例えば、メキシコシティのイスタパラパ地区には、ミチョアカン州から移住してきた約 120 の先住民家族が住んでいるが、この地区の隣人たちは、常にこのことを不快に感じており、不満をあらわにする。彼らは、先住民たちがこの地区に住居を建設して、通りを「侵略」したと主張する。また、ケレタロ州出身の先住民集団が、メキシコシティのローマ地区の荒地の一画に廃材で住居を建設したことがあったが、数年後に火事で燃えてしまった。この先住民集団では、中流階級の家庭が多いこの地区からの、先住民の立ち退きを主張していた隣人の仕業だとして、2 つの住民集団の間に対立が起きている[Oehmichen 2003]。

また、特に都市においては、先住民に対する偏見が存在する。例えば、麻薬を常用する先住民青年を見て、「先住民＝麻薬中毒者」という図式が構築されやすい。あるいは、先住民が犯罪を犯すと、それは「先住民だから」ということになり、非難や怒りの矛先は犯罪者個人にではなく、「先住民」に向けられる。この文脈で「メスティソだから」「白人だから」という言葉が使われることは、まずない。このような偏見の例を挙げると、筆者は、メキシコシティの地下鉄の駅をメスティソの男子学生と歩いていたとき、先住民であると思われる初老の男性とすれ違った。そのとき、男性が肩から

担いでいた荷物が筆者の肩にぶつかったのだが、男性は無言で通り過ぎた。それを見た男子学生は、「あいつはインディオだから、マナーを知らないんだ」と吐き捨てた。人通りの多いメキシコシティの地下鉄の駅では、人にぶつかってそのまま通り過ぎることは珍しいことではない。しかしこの場合には、その行動は、彼が先住民であるという、「分かりやすい」理由に収められたのである。

また、筆者の知る、メスティソのメキシコ人女性は、先住民の権利拡大には反対だという。その理由は、「メキシコ人のひとりとして権利を与えられたいのならば、メキシコの法律を守るべきだから」である。彼女は、「麻薬を常用したり、子どもを売ったりすることを『我々の文化だ』と主張して、権利だけを得て守られようなんて、虫がよすぎる。そういったおぞましい習慣を捨てるのが先だ」と主張する。確かに、麻薬に依存したり、貧困から、自らの子どもを売ったりする先住民がいないとは言い切れない。しかしそれはごく少数であり、しかも、より重要なことは、これは先住民に限られた現象ではない。だが彼女は、「それでも彼らが未だにそういったことをしているのは事実だし、それを非難されたら『我々の文化を認めろ』と言い出すに決まっている。いつもみたいに」と言い切る。先住民が、人身売買を自らの文化だと主張するなどとは到底考えられない。先住民の一部の人々による行為を（実際には、メキシコ人全体の一部の人々によるものなのであるが)、先住民全体のものとみなす、典型的な偏見の表われである。

非先住民による先住民の見方の別の例を挙げると、筆者の知る、メキシコシティ在住のある老人は、自らに「インディオの血が混じっている」ことを「自慢」する。彼の外見的特徴は、ほぼ白人のそれであり、経済的には富裕層を形成している。夫人は、ドイツ系の白人であり、2 人とも流暢な英語を話す。彼によると、彼の遠い祖先の一人が先住民であるという。小さな言い間違いをしたときや、間の抜けた行動をしたとき、彼は決まって「だって俺はインディオなんだ…」と、おどけて悲しそうにしてみせるのである。また、彼が、夫人の苦手とする典型的なメキシコ料理を口にするときには、「俺はインディオだからな！」と、「誇らしげに」強調する。夫人は、「私自身は純粋な白人なのだけれど、まさかインディオと結婚することになるとは思わなかったわ」と笑う。先住民と白人との混血は、基本的にはメスティソであり、彼の場合、外見や経済的・社会的地位から白人とみなされてもおかしくはないのだが、彼らは事あるごとに「インディオ」を強調する。彼らにとって、祖先の一人が先住民であること

は笑いの種であり、外見的には分からないにもかかわらず強調するほどの「大事件」なのであろう。

また、メキシコシティに住むある先住民女性は、食事をするために幼い子どもを連れて食堂に入ろうとしたところ、ウエイターに「お客さんの迷惑になりますから」と、止められたという。ウエイターは、彼女が客に物乞いをしに来たと考えたのである。「違います、食事をしに来たのです」と彼女が告げると、「失礼しました、どうぞ」の一言とともに店内に通されたが、彼女は「あの時は本当に悔しくて、悲しかった。せめて、子どもがまだ何も分からない歳でよかった」と話した。

これらの例は、全て筆者がメキシコシティ滞在中に経験したものであるが、一部の人々による、例外的な反応ではないことを付け加えたい。これほど露骨ではないにしても、同様の経験は、枚挙にいとまがない。都市において先住民は、非先住民に決して歓迎されてはおらず、差別と偏見に満ち、時に攻撃的な視線にさらされているといえる。しかも、この偏見や差別の文化、慣習は、先住民自身が感じるほどには、非先住民によって認識されていない。非先住民は、自らの態度が差別的であることに無自覚なのである[24]。このような差別・偏見への恐れや嫌悪感が、時に先住民が公共の場でのサービスや権利を放棄したり、あるいは先住民の子どもたちが学校を退学したりすることの原因であろう。では、このような状況に置かれた先住民に対して、政府はどのような対応をしているのだろうか。次節では、メキシコの先住民政策を検証する。

(2) メキシコの先住民政策

メキシコの先住民政策は、時代に沿って変化してきた。まずは、先住民政策の歴史を、時代ごとに簡潔に述べる。

スペインによる植民地時代には、「新大陸」の開拓と植民化のための資金が不足していたため、メキシコの鉱山から銀を大量に採掘し、本国へ輸送する必要があった。先住民は、功労に応じた「報奨」として、征服者たちに割り当てられ、労働力となった。スペインから征服者たちによって持ち込まれた病気のみならず、この時期に始まる過酷で危険な労働によって、先住民人口はかなり減少した。またこの時期、スペイン人たちは、先住民文化を野蛮なものとみなして土着の宗教を禁止し、キリスト教化を強いた。しかし先住民たちは、スペイン人の目の届かないところで、あるいはキリスト教と混合させて自らの宗教を信仰し続けた。これが現代に続く、土着キリスト教

の始まりである[Moreno 1994:53-66]。

この後、時代は1821年の独立から1910年のメキシコ革命へと移行するが、その間、主に白人によって占められる支配者層は、先住民を社会・経済階層の底辺に位置づけ続けた。同時に、混血化の進行の結果として、メスティソがメキシコ社会の大部分を占めるようになり、先住民は次第にマイノリティとなっていった。

このような状況の中で、1920年代に始まったのがインディヘニスモ（先住民復権運動）である。この運動は政府によって担われ、その目的は、メキシコのナショナル・アイデンティティとして先住民文化を復興し、同時に、それまで社会の周縁に置かれていた先住民の地位の向上を図ることであった。インディヘニスモは、当時文部大臣であったバスコンセロスによって推進された。彼は、ナショナル・アイデンティティの高揚のために、公共建築物に壁画を描くという方法を選び、著名なメキシコ人の画家たちに、「メキシコ的なもの」を描かせた。この「メキシコ的なもの」とは、主に古代からのメキシコの歴史や民衆の生活であった。当時描かれた壁画は現代にも多く残されているが、その人物のほとんどが褐色の肌を持った先住民であった。これによって、先住民文化こそが「メキシコ的なもの」であると国民に認識されるようになり、「メキシコ人」としてのナショナル・アイデンティティが構築されるようになった。このことから、ナショナル・アイデンティティの創出という点においては、インディヘニスモは一定の成功を収めたといえよう。

インディヘニスモのもうひとつの目的は、先住民の生活や地位の向上であった。しかしこれは、先住民内部から発生した要求や運動ではなく、政府による「上からの」政策であった。すなわち、実際には、「『遅れた』文化に属しており、国家の進歩や発展、統合の『障害』であった」[Castellanos 2001:381]先住民を、「実際にメキシコと彼ら自身の発展に貢献するようなメキシコ人に変えていく」[高山 1987:421]ことが目的であった。メキシコの全国先住民庁（INI）の初代長官であったアルフォンソ・カソは、「先住民」と「国家」という概念の間には大きな隔たりがあり、それらの間に存在しうる唯一の関係は、先住民が国家に統合されることである、という見解を示している[Montemayor 1999:88]。つまり、先住民の地位の向上を謳ったインディヘニスモの究極の形態は、脱先住民化・同化政策だったのである。そのため、1970年代には、インディヘニスモは先住民を否定するものだとして先住民・非先住民双方からの批判の対象となり、行き詰まりを見せた。

その後、メキシコにおいては、国民統合に替わって、文化的多様性・多民族国家という概念が注目されるようになり、その潮流は現在まで続いている。先住民の文化的相違性を認め、その出自に誇りを持つことを是とする、「etnodesarollo（『民族』と『発展』という単語からなる造語）」という新しい概念も登場した[Castellanos 2001:382]。「同化」「統合」を明言した政策は消滅し、「平等」「参加」「権利」「多様性」「土地と資源の回復」といった言葉が、先住民政策を形成するようになった。しかし、長年続いた統合政策からの転換は容易ではなく、国民の意識の変化も乏しいままであった。またこの間、メキシコは石油危機に引き続き、経済危機による「失われた 10 年」(25)を経験し、国内では経済格差が拡大した。社会経済階層の底辺を形成する先住民の生活は、以前にもまして厳しくなり、農業経済から工業経済への政策転換は、農業に従事する先住民を直撃した。その結果、現金収入を求めて都市へ移住する先住民が増加し、有効な先住民政策が欠如していたために、脱先住民化する人々が相次いだ。1990 年代初頭、メキシコ経済はようやく回復の兆しを見せ、92 年にはアメリカとカナダとの間で北米自由貿易協定（NAFTA）が締結された。これをきっかけに、政府は新自由主義経済化の推進を図った。これに対して、政府の経済政策から先住民は取り残されているとして、1994 年に蜂起したのが、サパティスタ民族解放軍（Ejército Zapatista de Liberación Nacional, 以下 EZLN）である。EZLN 総司令部は、先住民が置かれてきた悲惨な状況、その原因となった自由・民主主義の欠如と収奪の歴史を声明として発表した[高山 1999:69-71]。ここでは、この事件についての議論は省略するが、EZLN の蜂起は、インターネットなどを通じて、この国の抱える問題を、国内のみならず世界に知らしめることとなった。このことは、言葉のみが先行し、実情がともなっていなかったインディヘニスモ以降の先住民政策を、多少なりとも動かすきっかけとなった。また、世界的に広がりつつあった先住民復権運動もこれを後押しした。当初メキシコ政府は、軍隊による蜂起軍の鎮圧に自信を示していたが、その後和解への交渉が始まり、対話は中断と続行を繰り返しながら、10 年後の現在も続いている。EZLN は、先住民の生活を保障する集団的権利や自治権を求めてきたが、それに対する回答は未だ明確になされてはいない。しかし、EZLN の蜂起は、メキシコ国民に先住民問題を直視させ、先住民政策を充実・実現させるための問題提起としては、大きな役割を果たしてきたといえよう。

最後に、現在のメキシコにおける先住民政策の根幹を成す国際条約、国際労働機関

（International Labour Organization, 以下 ILO）第 169 号条約について簡潔に述べる。ILO169 号条約とは、「独立国における原住民及び種族民に関する条約」であり、先住民の権利の回復や保護を目的とし、1989 年の ILO 総会で採択された[26]。メキシコにおいては 1989 年に署名され、翌年に批准された。また、これにともなって 1992 年には、メキシコ憲法に初めて「メキシコ国家は多文化である」という記述がなされた。1990 年以降、特に 1994 年の EZLN の蜂起以降に発表された声明や法律は、ILO169 号条約に基づいている。また、州レベルでも先住民政策は重要な議題になっており、先住民人口が増加しつつあるメキシコシティでも、ILO169 号条約に基づいた政策が提唱されている。このように、メキシコにおいて先住民政策は年々充実してきており、それにともなって先住民の立場も、数十年前と比べると格段に向上していると考えられる。しかし、条約や法律、政策の適用や遵守は、未だ十分であるとはいえず、現状は、先住民が享受すべき状況からは程遠い。これが、EZLN がその活動を終了しない理由であり、この国の文化的多様性や多民族性に関する国民意識の低さの象徴であろう。

次章では、非先住民からこのような待遇を受ける先住民の、都市におけるアイデンティティを、メキシコシティを事例に分析する。

第３章　メキシコシティへ移住した先住民のアイデンティティ

１．脱先住民化・メスティソ化

都市へ移住した先住民のアイデンティティの変化として挙げられる、代表的なものがメスティソ化である。メスティソ化とは、すなわち脱先住民化である。先住民と、メスティソのうちモンゴロイド系の身体形質の強い人々とを、外見的に区別することは不可能である。そのため、先住民であっても、メスティソ風の衣服を身につけ、メスティソ風の髪型をし、スペイン語を話せば、少なくとも外見的にはメスティソとなることが可能なのである。Montemayor は、メスティソ化した先住民は、「国内における文化的・経済的な移民である」[Montemayor 2000:82]と述べる。先にも紹介した、2002年の人口と住居に関する国勢調査に現われた、先住民言語を話すが自らを先住民として認識しない 210 万人の人々は、まさにメスティソ化を反映している。

都市に移住した先住民がメスティソ化する理由は、先住民であることに起因するさまざまな都市生活上の不利益から逃れるためである。前章までに述べてきた、非先住民からの差別や偏見、非友好的な態度は、先住民である彼らの人格や言動にかかわらず向けられる。これらの差別や偏見によって、精神的苦痛を受けるだけでなく、就くことができる職業が実質的に限られ、経済的な不利益を被ることもある。都市において彼らは、一個人である以前に「先住民」として認識され、非先住民による「先住民」への反応によって、脱先住民化へ向けた無言の圧力を受けるのである。このような場合、メスティソ化とは、自らのアイデンティティの隠蔽であり、自己防衛のための擬態である。彼らが先住民としてのアイデンティティを真に失ったのか、メスティソの持つ文化規範を受け入れて自らのものとしているのかどうかは、問題ではない。重要なのは、可視的な先住民的特徴を自己から取り去り、周囲から非先住民（メスティソ）だと認められることである。メスティソ化の過程においては、彼らの先住民的特徴とともに、都市において先住民と彼らの抱える問題は見えないものとなり、文化的多様性や多民族性は、人々の意識に上りにくくなる。

メスティソ化した「元先住民」と先住民との関係は、そのメスティソ化の目的によるところが大きい。現金収入を得るために都市へ移住してメスティソ化した人々は、

一般的に、故郷へ送金したり、故郷での祭りや行事の際には帰省したりすることが知られている。これは、都市においては便宜上メスティソとして生活していても、それまでのアイデンティティや故郷との文化的なつながりをある程度残していることの表われである。彼らは、その故郷とのつながりにおいて、しばしば先住民社会に「メキシコ文化」を持ち込む役割を果たすと考えられる。一方、いわゆるエリート層の場合には、やや事情が異なる。高度な教育を受け、社会経済的な階層を上るための妨げとなる先住民性を意識的に自己から切り離した人々は、しばしば先住民としてのアイデンティティや、先住民とのかかわりを完全に拒否する[スタベンハーゲン 1981:133]。また、同じく高等教育を受けた場合でも、教師や弁護士などの専門職に就き、国民社会と先住民との仲介者としての役割を果たす者もいる。

先住民の都市への移住や、それにともなうメスティソ化は、彼らの文化の再生産を困難にする。メスティソ化した人々や、スペイン語が流暢でないがために不当な扱いを受けてきた人々は、かなりの割合で子どもに先住民言語を伝えることをしない。差別や学校教育、将来のことなどを考慮して、子どもに先住民言語を伝えない選択をする親たちは年々増加している(27)。このような場合、子どもたちの多くは生まれながらにメスティソとして育ち、「メキシコ人」としてのアイデンティティを構築する。親がメスティソ化せずに、子どもに先住民言語を教えない場合、子どもたちの多くは、彼らの親が「インディオみたいに」装ったり振舞ったりしないように望む[Sánchez 2002]という調査結果がある。都市では、家族までもが脱先住民化の圧力となりうるのである。また、新しい世代に受け継がれないことによって、話し手の数が減少しているだけでなく、話し手の大部分が高齢者となり、滅亡の危機に瀕している先住民言語も少なくない。同質化を求める圧力によって、マイノリティである先住民文化がまさに抹消されようとしているのである。

2．先住民性を維持しながらも主張しない人々

メスティソ化とは、先住民が都市で生き残るための戦略であるが、先住民性を維持しながら都市で生き残る人々も存在する。彼らは、都市での圧力にさらされながらも、自らのアイデンティティを維持する。あるいは、都市という、それまでとは異なる環境に身を置くことで、自らのアイデンティティが強化されるということも考えられる。

彼らは、先住民であることを声高に主張するのではない。しかし同時に、先住民で

あることを隠そうともしない。メスティソ風に装おうという努力をせず、先住民どうしで集まって居住するため、先住民であることは明白である。

彼らの中には、一時的移住者と呼ばれる人々が含まれる。これは、一時的に地方から都市へ移住した後に再び地方へ戻る人々であり、その主な理由は、農閑期などに現金収入を得ることである。彼らの生活基盤は、あくまでも地方の共同体にある。そのため、都市で一時的に先住民であることの不都合を感じたとしても、それはメスティソ化へ向かう推進力にはならない。なぜならば、そうなることで逆に共同体での生活に不都合を生じることがあるからである。

一方、出身地に戻る予定はなくとも、その先住民性を維持する人々も存在する。彼らの先住民性の維持に大きく貢献するのが、都市における先住民コミュニティであろう。すでに述べたように、彼らは、家族や親戚、同じ共同体の出身者などを頼って都市へ移住することが多く、同郷の者どうしでコミュニティをつくり生活する例がよく見られる。彼らは、出身共同体の統治システムをとり、行事を行い、会合を行う[Sánchez 2002]。都市における先住民コミュニティで、出身共同体が再生産されているのである。このコミュニティは、外部から身を守り、ひいては都市での生活を守るための防衛手段である。彼らは、コミュニティの外部では先住民として厳しい環境に置かれながらも、信用の置ける仲間との相互扶助の上に、先住民として生きることを選んだ人々である。これも、都市での生き残り戦略なのである。

バターワースの調査によると、ティラントンゴ村から移住したミシュテコ(Mixteco)と呼ばれる民族集団の出身者は、メキシコシティにコミュニティを形成して生活しており、村で生まれた限り、自らを先住民だと認識している。一方、メキシコシティで生まれた人は自分を「メキシコ人」だと感じているが、祭りや行事の際には村に戻り、結婚は同村出身者間で行われることが多いという[黒田 1996:35-36]。このように、移住者たちは都市における擬似先住民共同体で生活し、少なくとも移住1代目のものは、そのアイデンティティを維持している。

筆者は、このように暮らす先住民女性の一人、マリアにインタビューを行ったことがある。彼女は、ナウア（Nahua）という民族集団の出身で、以前はオアハカ州に居住していた。現在62歳で、メキシコシティに移住して20年になるという。その20年間、彼女はずっと家政婦として働いてきた。故郷で結婚し、ともにメキシコシティへやってきた夫は現在別の女性と暮らしており、彼女は30代の娘と、彼女の子どもと

ともに暮らしている。マリアは、一見して民族衣装と分かるワンピース状の衣服を身につけ、長く伸ばした髪はいつもひとつに束ねられている。民族衣装を身につけ続けることについて、彼女は「子どもの頃からずっとそうだったから」という。メキシコシティに来てから、先住民であるために不当な扱いを受けたことは何度もあり、それは今も変わらないが、「もう慣れてしまった」と話す。それよりも辛かったのは、故郷でお金も食べ物もなかったことであり、それに比べたら今の生活ははるかによいという。メスティソのように装うことで、周囲からの否定的な反応が改善されると考えたことはないか、という筆者の問いに、彼女は「それはそうだろうが、私はそんな服を持ってないし、近所の人もみんな自分の衣装を着ている。先住民に見えなくても貧乏人に見えるのは同じなんだから、馬鹿にされるのは変わらないよ」と話した。また、彼女の娘は「他の人たちと同じような服」を着て、食料品店に勤めており、その収入は彼女のものを上回っているという。それが一番の誇りだと、彼女は話した。

彼女が、民族衣装を着て先住民風の髪型をし続けるのは、原初的愛着と習慣によるものである。また、彼女の住居は都市の先住民コミュニティの中にある。そこで生活し、勤め先と家を往復し続ける限り、先住民であることで、彼女が不快な思いをすることはそう多くはないようである。しかし、彼女の話からは、非先住民からの差別・偏見に対する諦めの姿勢と、脱先住民化しても貧困層から抜け出せるわけではないという絶望が読み取れる。彼女は比較的高齢なこともあって、先住民コミュニティにとどまることと、諦めることが、都市で生きるための手段なのであろう。

また、バターワースの調査やマリアの娘からは、先住民コミュニティに居住していても、移住2代目以降ではアイデンティティのあり方が変化していることが読み取れる。都市に生まれ育った者にとっては、スペイン語を話し、工業生産された衣服を身につけることのほうが実用的である。意識して装わなければ、コミュニティの外では「先住民」として扱われることもなく、先住民的なものに触れることもない。このような生活の中で、先住民としてのアイデンティティを獲得する、あるいは維持することは容易ではないだろう。しかし、中にはそのような状況に育ちながらも先住民性としてのアイデンティティを獲得し、それを主張する者がいる。次節の第1項では、そのようなケースを紹介する。

3．先住民性を主張する人々

(1) アイデンティティの「発見」あるいは「再発見」

先住民としてのアイデンティティを持っていなかった、あるいはそれを一度捨てた人が、都市において、先住民としてのアイデンティティを獲得する、あるいは取り戻すことがある。先住民としてのアイデンティティを持っていなかった人々というのは、主に生まれながらに都市で生活する、先住民の移住者の子どもである。彼らは、外見的にメスティソと区別されることはない。また、親が先住民である、あるいは先住民であったことを知っていても、彼ら自身は「メキシコ人」としてのアイデンティティを持っていることが一般的である。

筆者は、2002年11月にこのような女性の一人にインタビューをすることができた。アナという32歳の独身女性である。彼女の両親は、プレペチャ（Purépecha）と呼ばれる民族集団の出身であり、ミチョアカン州に住んでいた。彼女が2歳のとき、まず父がメキシコシティに移住し、仕事と家を見つけた後、家族を呼び寄せた。移住の目的は、よりよい暮らしのためであったと彼女は話す。当時の家族構成は、両親と兄、それに彼女であり、後にメキシコシティで2人の弟が生まれた。両親は、互いにプレペチャ語で会話するが、子どもたちにそれを教えることはなく、親子間の会話はスペイン語で行われていた。年に数回、主に行事や祭りの際に故郷に帰ることはあったが、2歳からメキシコシティで生活する彼女には、故郷での暮らしの記憶はない。彼女の祖父母はスペイン語を片言程度にしか話さず、意思の疎通は困難であったという。彼女は、メキシコシティの公立学校でスペイン語による教育を受けていたが、10歳を過ぎた頃から、彼女の両親の話す言葉によって彼女が先住民の出自であることを知った生徒からいじめを受けるようになった。彼女は、その頃から、自分の出自が周囲の人とは違うことを認識するようになったという。アナが、いじめに屈する態度を見せなかったこともあって、いじめは次第になくなった。しかし、その後も時折、「よそ者」としての微妙な視線を感じることがあり、自分の出自に関して「何かもやもやした気持ち」を常に抱いていたという。彼女は、それまで抱いていた自意識と、それとは異なる周囲からの視線の間で、自分は何者なのかと自問していた。そして16歳になったとき、彼女は、両親の話す言語を学ぶことを決意した。自分のルーツを知りたいという気持ちが、その理由であったという。先住民言語は、基本的には文字を持たない。しかし当時、先住民言語保存の取り組みの一環として、プレペチャ語を表記する試み

が行われており、彼女は教科書となる本を手に入れることができた。プレペチャ語に関する研究は歴史が浅く、その本も決して充実した内容ではなかったが、両親の協力を得て、彼女のプレペチャ語は今では「スペイン語ほどではないけれど、意思の疎通は可能なレベル」まで上達した。文法を学習し、単語を反復して覚え、使わない期間があるとすぐに忘れるというプレペチャ語の習得は、「英語を学ぶときのようだった」と彼女はいう。プレペチャ語を学んでよかったことは、自分のアイデンティティが明確になったことと、祖父母と話せるようになり、彼らがそのことを大変喜んだことであったという。また、アナは学業の成績もよく、高校卒業後には大学に進学し、行政学を学んだ。大学に入学した頃から、彼女は、自らの民族の伝統的な衣装を身につけるようになった。彼女の故郷では、日常的には民族衣装を着ることは少なく、それは祭りや儀式のときに限定されているという。民族衣装は、すべてが手作りのため高価であり、大量生産された既製品のほうが安くて長持ちするという。それにもかかわらず彼女が民族衣装を身につけ始めた理由は、「とても素晴らしく、美しいものだから」であった。彼女が身につけるのは刺繍入りのブラウスで、そのような衣装を着て大学へ行くと、それまで親しかった友人が急によそよそしい態度を取ったり、見知らぬ人にあからさまにじろじろ見られたり、嫌がらせを受けたりすることもあったという。それでも彼女は、「これが私」と、民族衣装を着ることをやめなかった。一方で、学業は順調であったが、あと1年で大学を卒業できる見込みが立った3年目に、彼女は突然父親から大学を辞めるように説得された。彼女の弟が大学に入学することが決まり、経済的に苦しくなるというのが、その理由であった。しかし彼女は、説得には応じなかった。「弟はまだ入学していなくて、私はあと1年なのに、どうして私がやめなきゃいけないの、と思った」からである。伝統的に家父長制が強い先住民家庭では、女性の立場は弱く、特に娘にとって父親の意見は強い権限を持つ。だが、都市育ちの彼女は、女である自分より弟が優先されることに納得できず、結局、アルバイトで学費を稼いで卒業した。彼女は現在、あるテレビ局の資料室で働いている。彼女は、今も民族衣装のブラウスを着て出勤しているが、彼女の上司はそれを快く思っていないという。彼にとって、民族衣装のブラウスは「仕事場で着るにふさわしくない」服であり、彼女にもっとフォーマルなものを着るように要求している。しかし彼女は、「民族衣装は仕事に影響を及ぼすものではないし、私にとってはこれがフォーマル。先住民で、自分の民族の衣装を着ていてもちゃんと仕事はできることを証明したい。恋人も、応

援してくれている」と語り、民族衣装での出勤を続けている。

彼女は高等教育を受けた女性であり、いわば先住民の中では「教育エリート」である。先住民として、あるいは先住民の両親の元に生まれ、高いレベルの教育を受けた人々は以前から存在した。しかし彼らの大部分は、先住民としてのアイデンティティを捨て、メスティソとして社会との関係を構築していた。「彼らにとってはエスニックな意識の問題はなんらの関心事となっていない」[スタベンハーゲン 1981:133]のであった。アナのケースは、その対極である。先住民の両親の元に都市で育ち、成長の途中で先住民としてのアイデンティティを「発見」し、意識的にそれを獲得したのである。故郷においても、メキシコシティにおいても先住民共同体やコミュニティでの生活の記憶を持たずに育ったという環境と、周囲から受ける「先住民」への視線という状況の乖離が、彼女を先住民言語や民族衣装へと向かわせた。彼女は、「先住民」であることを自らの意思で選択したのである。彼女のように、自ら先住民としてのアイデンティティを獲得する、あるいは取り戻す「エリート」は、近年増加傾向にあるという[スタベンハーゲン 1981:133][28]。彼女のような、自らの認識と周囲からの視線の乖離という状況からだけでなく、「メキシコ人」としての長い都市生活の中で、かえって自己に内在する先住民性に気づき、それを探求するケースも報告されている[黒田 1995:213][29]。

(2) 生活手段としての「先住民」

次に、筆者がインタビューした別のケースを紹介する。彼女は、フリアという 40 歳の女性で、ミシュテコ（Mixteco）という民族集団の出身である。彼女の母親は、彼女を含めて 9 人の子どもを生んだが、そのうち 3 人は幼い頃に死亡した。彼女は、兄弟の中では最も年長であり、18 歳までオアハカ州の農村で家族とともに暮らしていた。一家は農業と牧畜業で生計を立てていたが、生活は苦しかったという。母親は、「子どもが生まれても、いつもその 1 年後にはまた妊娠していた」ため、彼女は幼い頃からよく家業と家事を手伝っていた。小学校には 2 年間通ったが、家業と家事の手伝いや幼い兄弟の世話のために、それ以上通うことはできなかった。彼女は、幼い頃は両親の手伝いが楽しかったという。だが成長するにつれて彼女の負担は増し、毎日の重労働に加えての貧しい生活に、次第に嫌気が差してきたという。「毎日の食事は、トルティージャ[30]と豆とコーヒーだけで、1 週間に 1 回くらい卵や果物が食べられた。いつ

もお腹がすいていた」と彼女は話す。18歳のある日、彼女は「これ以上の空腹に我慢ができず」、単身メキシコシティへ働きに出た。メキシコシティでは、同じ共同体出身の女友達を頼って、家政婦の仕事を始めた。彼女は、家政婦として数件の家庭で働いたが、待遇はさまざまであった。労働者として当然受け取るべき手当てを支払われなかったこともあるし、家族の一員のように接しられたこともある。家政婦が一般的にそうであるように、給料は多くはなかったが、彼女はその中から少しずつ、家族に仕送りをした。幼かった兄弟たちを助けるためである。家政婦として数年働いた頃、彼女は同じくメキシコシティに移住してきた他の民族集団出身の男性と知り合い、20代半ばで結婚した。数年後には長男が誕生したが、「出産の際の、病院の不適切な処置」のために、子どもは重い障害を持って生まれてきた。夫の収入だけでは家計が苦しかったために、彼女は働き続けようとしたが、彼女の出産とその後の入院の間に勤め先は新たな家政婦を雇っており、彼女は職を失った。彼女は他に収入を得る術を知らなかったので、家政婦として新たな勤め先を探したが、子どもを預けられる場所もなく、仕事を再開することはできなかった。しばらくは夫の収入だけで暮らしていたが、生活は苦しく、借金が膨らんだために、ようやく手に入れた家も手放さなくてはならなくなった。長男の状態から、将来的にも家政婦として働くことは難しいと考え、途方にくれた彼女は、メキシコシティに住むミシュテコのコミュニティを通じて全国先住民庁（INI）に助けを求めた。そこで彼女は、ミシュテコの伝統的な民芸品の作り方の指導を受け、週に1回、それらを販売するためのスペースを借りることができるようになった。故郷にいた頃、彼女は家業や家事に追われており、また18歳でメキシコシティへ移住したために、「大部分の女の子は、いくぶんかは知っている」民芸品の作り方を学ぶ機会はほとんどなかった。彼女は、故郷から物質的にも文化的にも遠く離れたメキシコシティで、初めて本格的に民芸品を作るようになったのである。民芸品の製作は家庭で行い、販売にも息子を連れて行くことができたので、彼女は子育てをしながら収入を得られるようになった。彼女には現在、5歳になるもう1人の息子がいる。長男は9歳になったが、話すことも歩くこともできず、彼女は今も2人の子どもたちに付き添って仕事をしている。

フリアは民芸品によって生計を立てているが、それは、都市民や観光客に売るために、意識的に都市で身につけた技術である。しかしながら、彼女の商品は、それを買う人々にとっては「先住民が作る『本物の』民芸品」としての価値があるのであろう。

彼女は、「先住民であること」によって生活手段を得たといえる。

政府機関である全国先住民庁は、商品化のために民芸品づくりを指導した。何も知らない都市民や観光客には、それはまさに「先住民文化」として映るに違いない。非先住民や外国人の客のために、彼女は民芸品を作り続ける。たとえその製作方法が彼女の故郷で行われているものと同じであったとしても、この民芸品は、非先住民によって商業の文脈において創り出された「先住民文化」である。彼女は、都市で再生産される「先住民文化」の担い手のひとりとして、それを発信しているのである。

別の例であるが、筆者がメキシコシティのある大通りを歩いていたとき、布にくるまれた赤ん坊を抱えて道端で物乞いをする、先住民衣装をまとった女性を見かけた。メキシコでは、赤ん坊を抱えて、あるいは幼児を連れて道端に座り込み、物乞いをする先住民女性は珍しくなく、「貧しい先住民女性像」としてステレオタイプ化されているといっても過言ではない。筆者が彼女の前を少し通り過ぎて交差点で立ち止まっていると、彼女は「セリョリータ、どうかお願いします」と声をかけてきた。そのときに目に入ったのであるが、彼女の抱える布の包みの中身は赤ん坊ではなく、赤ん坊の人形であった。彼女のまとう先住民衣装を、純粋にそのアイデンティティに基づくものなのかどうかを探ることまではできない。「誰が先住民であるかを決定するのは、本人の判断による」以上、それを探るという行動自体がナンセンスである。しかし彼女は、確実に「乳飲み子を連れた貧しい先住民女性」を演じていたのである。落合は、先住民が「オレはインディオだ」という言葉を口にするケースとして、屈折した投げやりな感情を込める場合と、メスティソや観光客に物乞いをする場合がある[落合1988:212-213]と報告する。筆者の出会った彼女の場合、先住民であることを言葉で主張するのではなく、「先住民像」を体現していたのであった。

(3) 先住民組織・先住民運動

これまでに挙げたケースとはやや異なり、メキシコシティには組織的に、時には声高に先住民性を主張する人々が存在する。それが、先住民運動を行ったり、先住民組織に所属したりする人々である。現在、メキシコシティには、メキシコ政府公平・社会開発局に登録されているだけで、58の先住民組織が存在する。そのなかで、移住者を対象にしたものは43団体にのぼる(31)。これらの団体は、それぞれ担い手であると同時に対象でもある先住民集団を持つ。それは、主に言語と出身地によって分類され

たものである。

このような先住民組織は、先住民によるメキシコシティへの移住が活発になった1940年代から存在していた。その初期の活動は、主に出身地である共同体に向けたものや、都市における生活の場としての擬似共同体の形成であった。

出身地の共同体に向けられた活動は、協会や学校などの公共建築物などの建設・修理のため、あるいは祭りや儀式のためなどの経済支援が中心である。時には、出身共同体の政治活動に参加する場合もある。共同体構成員の都市への移住は、その人口を減少させ、事実上その高齢化を促進するという点において、先住民共同体を危機的状況に導き得る。しかし同時に、移住者からのこのような経済支援は、共同体の安定的存続のためには不可欠な要素である。

1970年代頃になると、先住民組織の数は増加し、故郷への経済支援にとどまらない活動が活発になった(32)。これは、前出のインディヘニスモ批判が高まり、世界的に多文化主義の風潮が広がり始めた時期と一致する。先住民社会に対するメキシコ政府の同化主義的な政策が、先住民の反発を招き、かえって彼らの団結を深め、自らの文化の見直しの方向へ進ませる結果となったのである。政府は、過去の先住民政策を見直し、その文化や相違を尊重し、先住民が先住民として存在できるような社会の構築に努めるという姿勢を示した。メキシコ政府は、同化主義政策に代わって、多文化主義政策を提示したのである。そのために、それまでとは異なる方法で先住民問題に対処する機関を数多く設立し、同時に、先住民組織の結成を助長した(33)。

そして現在、共同体へ向けられた活動よりも一般的に重要視されているのが、彼ら自身の都市生活に向けた活動、および先住民社会の外へ向けた運動や交渉である。彼らの都市生活に向けた活動は、新たな移住者のための住居と仕事探しなどの相互扶助的なものや、独自の文化の都市における再生産と若い世代への継承などが挙げられる。[Sánchez 2002]。彼らは、同郷の仲間が快適な都市生活を送ることができるよう援助するが、同時に、そのことによって失われがちな独自の文化の再生産にも尽力する。つまり、「都市生活を十分に享受しつつ、先住民であり続けること」が彼らの理想である。そのための文化の再生産は、彼らにとって特に重要な課題である。彼らは、都市において独自の音楽を演奏し、舞踊を踊る。自らの先住民言語を子どもや若者に教え、伝統行事を都市で行う。これは、いうまでもなく、彼らの文化の衰退や消滅を危惧してのことである。このような活動の目的は、その文化の保護や再生産だけでなく、結果

として都市において民族的アイデンティティを維持し、あるいは構築することである。

このようにして、民族的アイデンティティの元に結束した先住民組織は、各種政府機関との対話や交渉という運動に乗り出す。先住民問題に対処する機関は、彼らが置かれた周縁状況からの救済や、さまざまな問題の解決のために経済援助を行い、先住民のための政策や法律を立案し、実行する。彼らは、民族衣装に身を包み、彼らの文化的独自性を主張し、その文脈に即した政策やサービスを要求する。具体的には、悲惨で危険な住居の改善、教育環境の充実、雇用の確保、各種公共サービスへのアクセスの確保、先住民の権利の保護などがその代表的なものである。このような、先住民が自らの文化の差異を強調し、社会に適応しようとする姿勢を、関根は「多文化主義適応戦略」[関根 1999:278]と呼ぶ。先住民のための機関は数多く、すでに恩恵を受けている問題を他の機関に訴えて交渉に持ち込み、さらなる恩恵を受けようとする「二重取り」までもが報告されている[Lemos 2003]。

実際に、先住民の要求に応えるためにさまざまな政策が打ち立てられ、サービスが提供されてきた。国際的な多文化主義や先住民復権の風潮もこれを後押しし、メキシコ政府は国内外に向けて、先住民の存在と権利を認めるというメッセージを発信した。先住民は、「同化の末に消滅すべき人々」から、「その文化や相違、存在を認められるべき人々」へと変化したのである。1994 年における EZLN の蜂起とその国際的インパクト、それに続く対話・交渉の中で、政府は改めてその姿勢を強調する必要があった。それとともに、先住民に対する多文化主義政策は強化された。

先住民の存在がこのように変化し始めた時期と、自らを先住民であると同定する人々が増加し始めた時期は一致する。数十年間に、先住民政策は変化した。またその間に、都市としてのメキシコシティの無秩序な拡大や、経済格差の拡大にともなう貧困層の増加、治安の悪化によって、「都市において、先住民だけが唯一の悪者ではなくなった」[Lemos 2003]。先住民にとっての都市環境は、いくぶんか望ましい方向へ変化したのである。しかし、急進的な先住民組織の構成員たちは、これに満足することはない。彼らは、否定的な環境に置かれないという意味で非先住民と同等の地位を得るのではなく、「先住民」として独自の地位を得ることを求める。マイナスをゼロにするのではなく、プラスへ転換することを要求するのである。

そして、これらの先住民組織の注目すべき最近の動向は、民族の垣根を越えた運動である。従来は、民族別に構成されていた先住民組織が、それぞれの民族あるいはそ

の構成員のために、個々に活動していた。しかし近年、複数の先住民組織が、共通の目標のために行動をともにするようになったのである。この傾向は、EZLN の蜂起以降、より強化されてきた。このような多民族組織は、主に彼らに共通の問題点の改善、すなわち生活環境の整備や、開発主義の中で奪われた土地権の回復、先住民の権利の保護などを訴える。特に急進的な人々の間では、近年、自治の要求も高まりをみせる。Castellanos は、「自治とは、国家から『去る』ことではなく、先住民文化の相違をもって、国家に包含されることを意味する」[Castellanos 2001:380]と述べる。すなわち、国内で独自な存在として認められ、しかし同時にメキシコ国民であることを完全に享受することが、彼らの目的なのである。

多民族組織は、もともと存在した複数の民族別の先住民組織によって構成される。しかし、これは先住民自身が内発的に組織したものではなかった。政府やいくつかの政党、全国先住民庁（INI）が、団結してより規模が大きく強固な組織を作ることを彼らに「指導」したのである。このとき、政府や INI にとって、先住民とはこのようにして指導し、啓蒙すべき存在であった。そして多民族組織は、この指導と先住民組織のリーダー的存在であった知識人や弁護士などのリーダーシップの結果として誕生した。しかし、その組織は、政府や INI が想定していた以上に活発に機能した。結果として、政府や INI は多民族組織の相次ぐ要求に十分に応えることができず、現在ではそのことによって批判される立場となっており、組織はその管理外にある(34)。

先住民の民族組織や多民族組織は、都市へ移住した先住民に民族意識を高揚させ、さまざまな恩恵をもたらしてきた。しかし、その活動は一概に順調であるとはいえない。活動が活発になり、受けられる利益が拡大するにつれて、組織内あるいは組織間における衝突が発生するようになった。組織の代表者とその構成員、あるいは複数の組織間における利益や恩恵の奪い合いのケースは、次第に増加している。組織内での目的の不一致や、共同体での統治システムをそのまま組織内に適応すべきだとする共同体出身者と、それに反発する都市出身の若い世代の間での衝突も報告されている。また、若い世代の間では、組織の活動によって周縁状況からの脱出という目的を果たした後、「先住民」であり続けるべきかという議論が交わされることがある[Lemos 2003]という。

さらに、先住民運動や組織は、全ての先住民に恩恵をもたらすわけではない。メキシコシティに移住し、文化変容を遂げてメスティソ化した人々は先住民とはみなされ

ないため、その対象外となる。もっとも、メキシコ政府公平・社会開発局によると、メスティソ化していた人々が再び先住民としてのアイデンティティを標榜するケースが、近年増加しているという[35]。また、メキシコは強力な中央集中型の国家であるため、首都のメキシコシティには、他都市と比較して圧倒的に人口・モノ・資本・情報などが集中し、地方とのその差は歴然としている。それゆえ、メキシコシティでの先住民運動は、政府に大きなインパクトを与え、さまざまな政策や多大な予算などの措置がとられる。そして、そのことは非先住民社会や国際社会にも知られるようになる。しかし、都市へ移住せず、あるいはすることができず、政府や各種機関との交渉の手立ても持たず、地方でより強い周縁状況に置かれた先住民は、その恩恵を受けにくい。地方には、このような都市における動向から「置き去り」にされた先住民が多数存在する。先住民を取り巻く状況は、その社会内部で多様化し、同時に格差が生まれているといえよう。

第4章　ラベルとしての「先住民」

前章では、メキシコシティへ移住し、その先住民性を主張する人々について、いくつかのパターンに分類して報告した。では、彼らの先住民としてのアイデンティティは、「現代の都市民」という文脈の中で、どのように解釈できるだろうか。各パターンの人々に共通するものはあるのだろうか。本章では、彼らの先住民性の主張を考察する。

テレビ局に勤めるアナは、生まれながらの「先住民」ではない。彼女が、先住民という自らのアイデンティティを発見したのは、それまでの自意識と周囲の反応の差がきっかけであり、当初彼女は先住民であることを周囲の人々によって意識させられていた、といえる。それが、先住民言語であるプレペチャを学び、現在では故郷でも日常的には用いられていない民族衣装を身につけるまでになったのは、ひとつには、自らが先住民としての文化的背景を持っていなかったからこそ、それを強く求めるという心理が作用したと考えられる。ここまでは、先住民に限らずとも、思春期のアイデンティティ探求の過程として、分析可能である。

では、彼女はなぜ先住民性を主張し続けるのだろうか。都市では、先住民に対する差別・偏見は根強く残っている。さらに、社会階層と肌の色が相互に関連しあうメキシコでは、彼女のような知的労働の現場には、非先住民の中でもより肌の色の白い人々が多く集まる傾向にあり、先住民への視線は厳しい。実際に、彼女は職場で先住民衣装を着ないように、上司に要求されている。これに対して彼女は、「先住民で、民族衣装を着ていても仕事はできることを証明したい」と語る。これは、周囲の非友好的な環境や、経済的困難にもかかわらず高等教育を修了し、知的労働に従事することへの彼女の自負によるものであろう。彼女の希望は、先住民に対する否定的な見方をなくし、先住民にも能力があることを周囲に認識させることである。そして、それによって、現在のような、先住民に対する否定的な環境を改善することである。そのためには、周囲の攻撃的な環境や「先住民」への否定的なステレオタイプを強く意識すればするほど、彼女は「そうではない自分」を主張する必要がある。そのための戦略として、彼女は「先住民」という分かりやすいラベルである民族衣装を身につけると考えられる。この場合、民族衣装を身につけることが、現代という文脈における実際の先

住民文化であるかどうかは、重要ではない。実際には、民族衣装は、次第に使用される機会が少なくなっているものの、未だ維持されている先住民へのステレオタイプの代表的なものである。ともかく彼女にとって重要なのは、周囲の人間に、彼女が先住民であると認識させることなのである。

このように考えられるのは、彼女にとって先住民衣装は原初的愛着を持つものではないからである。彼女が民族衣装を用い始めたのは、大学生になってからである。また、民族衣装は、高価で耐久性は高くなく、故郷においては日常的には用いられていないと彼女は語る。現代において、それは決して実用的ではないといわざるを得ない。都市における先住民文化の再生は、彼女が、高等教育を受け、高価な民族衣装を着るだけの経済的余裕がある、「先住民らしからぬ」女性であるからこそ可能なのである。そして、その「先住民らしからぬ」女性が民族衣装を着て先住民であると周囲に知らしめること、これが彼女の目的である。民族衣装の着用は、そのための戦略なのである。先住民に対する「無能」「無学」「無知」といった否定的なステレオタイプを否定するために、彼女は別のステレオタイプである民族衣装を利用し、その先住民性を主張する。彼女は、先住民組織で活動する人々のように、組織として政府に働きかけているわけではなく、そこから恩恵を受けるわけでもない。しかしながら、彼女は高等教育を受け、社会的地位の高い仕事についたエリートとして、都市における「先住民」への否定的なステレオタイプへのアンチテーゼを、身をもって発信しているのである。

次に、民芸品を売るフリアのケースを分析する。彼女は、先住民の伝統文化である民芸品を作り、売ることで収入を得ている。子どものためにそれまでの家政婦という仕事を失い、他に収入につながる技術を持たなかった彼女は、「民芸品を作る先住民」になることで生活の糧を得られるようになった。この民芸品は、都市の非先住民や外国人観光客に向けられたものである。すなわち、彼女にとって、先住民であることは、都市における生存戦略であるといえよう。このことは、彼女の民芸品製作が都市において、収入を得るために、しかも政府機関である全国先住民庁の指導で始まったことによって裏付けられる。民芸品製作は、先住民であり、移住者である彼女に内在する文化ではない。しかし、少なくとも非先住民にとっては、それは明確かつ分かりやすい「先住民文化」なのである。彼女は、「伝統を受け継いで民芸品を作り続ける先住民」という、非先住民によって作り上げられたステレオタイプを利用して生活する。彼女がその他の点で先住民性を主張することはない。彼女の目的は、収入を得ることだけ

だからである。先住民であることは、彼女が都市で生き抜くための戦略である。

筆者の見た物乞いの女性も、フリアと似た戦略を用いる。彼女は、「都市へ出てきたものの、乳飲み子を抱えて路頭に迷う貧しい先住民女性」を演じる。このステレオタイプは、非先住民が先住民に対して持つそれの中では代表的なものである。実際には、物乞いに頼る人々は先住民人口のうちごく一部であるとして、声を上げてこのステレオタイプを否定する人々は多い。前出のアナも、先住民の全てが最貧層を構成するわけではないと強調する。しかし赤子の人形を抱いた彼女は、自ら進んでそのステレオタイプにはまり、生活手段とする。非先住民が作り上げたステレオタイプを逆手にとり、それを利用しているのである。しかし、フリアが利用する「民芸品を作る先住民」とは異なり、これは否定的なステレオタイプである。一部の先住民が懸命に否定するステレオタイプが、別の一部の先住民によって、意図的に再生産されていることは、注目に値する現象である。

そして近年、メキシコのみならず世界的な動向として出現したのが、先住民運動と、それにともなって先住民性を主張する人々である。このような人々、および彼らによって構成される先住民組織の目的はさまざまであるが、共通しているのは、自分たちの文化的差異が認められることと、従来置かれてきた否定的な状況を改善し、何らかの社会的上昇を図ることである。そのために絶対的に必要なのが、先住民性の主張、および強調である。自らの文化的差異を認められるためには、まずその差異を明確に主張する必要がある。そして、多文化主義政策のなかでの先住民運動から還元される恩恵・利益を得るためには、自らがその対象である、すなわち「先住民」であるということもまた、主張され、強調されなければならないのである。

このような背景の中、先住民性は主張されるのである。近年の多文化主義的風潮の中で、先住民に対する社会的な圧力が減少し、そのことによって、自らの先住民としてのアイデンティティを認める人々が増加している、という報告は数多い。しかし、事態はそう単純ではない。仮に、多文化主義的風潮の中で差別や偏見が減少し、先住民が自由にそのアイデンティティを表明できることになったのならば、そこで表現される文化は、それまでの人生で彼らが無意識に身につけてきた、現代に生きる先住民文化でなければならないし、その表明の仕方も自然なものでなくてはならない。

しかし、現実は必ずしもそうではない。都市において、先住民がその先住民性を主張する場合、そのアイデンティティや文化は、しばしば操作される。先住民組織に属

する人々が、政府機関との対話や交渉に際して、普段は用いない民族的な衣装や装飾品を身につけるのは、その代表的な例である。また、都市民としては必要性の低い民族言語を始めとする独自の文化を、移住 2 世、3 世の若年層に伝承する活動が近年盛んに行われていることも、そのためである。関根は、先住民集団が、多文化主義政策の恩恵受ける目的で文化の独自性を主張するためには、「伝統的生活様式や言語を完全な形で維持している必要はなく、民族的独自性を他の人々が納得し了承してくれる程度に表示できればよい。場合によっては、長い同化政策のもとで失われた文化・言語の復権や再生、あるいはホブズボウムやレンジャーが主張するような『伝統の創造』さえ行う必要が生まれる」[関根 1999:282]と述べる。

メキシコにおいては、1920 年代に始まったインディヘニスモのために、先住民文化は広く国民に知られ、そのナショナル・アイデンティティを構築することとなった。しかしながら、インディヘニスモによって主に強調されたのは、当時の生きた先住民文化ではなく、過去の先住民文化であった。そのため、現在、非先住民が「先住民文化」であると認識しているものは、現代における実際の先住民文化とは必ずしも一致しない。よって、都市において先住民がその先住民性を主張するとき、現代のものとは異なろうとも、非先住民にとって分かりやすい「先住民文化」が提示されることとなるのである。

独特の衣装や言語の使用は、非先住民が先住民に対して抱く代表的なステレオタイプである。現在では、これらは次第に使用されなくなっていることが主張されることがある。先住民を、「原始的な人々」ではなく、現代に生きる同じメキシコ国民として印象づけるためである。また、先住民運動の場では、先住民に対する「無知」「文明を持たない」といったステレオタイプに対して、その文化的差異を強調し、先住民は非先住民とは異なる知識や文明を持つ、と主張されることがある。しかし同時に、ある種のステレオタイプが先住民自身によって選択され、再生産され、利用されているのである。都市における文化の再生産は、彼ら先住民社会内部の構成員によって担われ、同時に彼らを対象として行われる。しかし実際には、その活動は外部者である非先住民社会に向けられ、その文化的相違と存在を強調するものとして機能する。

また、現在、民族の垣根を越えた活動が盛んになっているが、これは注目に値する行動である。言語による分類だけでその数が 62 にも上るメキシコの先住民にとって、そのアイデンティティの最小単位は、自らの出身共同体レベルであるといわれてきた。

スタベンハーゲンは、先住民の意識について、次のように述べる。

> 一般に考えられているところでは、これらの地方共同体は、国民的生活に実際に一体化させられてはおらず、国民国家に対して周縁的(マージナル)な存在にとどまり、その構成員は、国民意識ではなくて、せいぜい共同体意識しかもっていない。しかし、これらの共同体は、白人あるいはメスティーソ文節からみずからを区別するだけでなく、同じような共同体相互のあいだでも同様に区別しあっていることが、強調されなければならない。実際には、ラテンアメリカではインディオは、ある均質の文化文節を構成しているのでは全然なく、たくさんのエスニック・グループからなりたち、それらは非インディオ文節と異なるのと同様に、しばしばそれら相互のあいだでも異なっているのである[スタベンハーゲン 1981:95]。

つまり、「先住民」というカテゴリーを創造し、彼らをその枠にはめてきたのは非先住民であり、彼ら自身は、それぞれ「ミシュテコ」や「プレペチャ」だったのである。民族集団間では言語も文化も異なり、時には土地の境界線や資源の利用をめぐる衝突も起きてきた。この種の衝突は、とくに近年交通網が整備され、また共同体の土地不足が深刻化する中で増加している。都市においても、出身民族に基づく組織間で、多文化主義政策から受ける恩恵をめぐっての対立が生じていることは、第3章で述べたとおりである。しかし現在、この枠を超えた「先住民」というアイデンティティが創出され始めている。これは、多文化主義政策に基づく利益要求者として、より大きな影響力を持つためだと考えられる。非先住民が作り上げた「先住民」というカテゴリーに、当事者である彼らが意図的に自らを当てはめているのである。これは、非先住民社会に対して自らの存在をより強く認識させ、より有利に交渉を進めるための戦略であり、新しい政治的アイデンティティだといえる。

このような、都市における先住民のアイデンティティをめぐる一連の動きは、メキシコ国内における先住民の立場が変化し、それにともなって彼らの意識が変化したことによるものである。先住民は長い間虐げられ、同化の圧力を受ける存在であったが、今や「先住民であることは、社会的向上の機会となりうる」[Lemos 2003]のである。より快適な環境を求めてメスティソ化したとしても、彼らの大部分は、単なる都市における貧困層の構成員となり、その厳しい環境で生き抜き続けなければならない。そ

れよりは、未だ残る否定的で攻撃的な反応を受けながらも、何らかの利益や恩恵を受けるために「先住民」であり続けることを選択する人々が存在するということは、十分に考えられることである。

以上のことから、都市における先住民性の主張は、明確な目的と戦略のもとに行われているといえる。その目的は、個人的なものから集団的なものまでさまざまである。近年の先住民のアイデンティティの表明の増加は、よく論じられるように、多文化主義に基づく、先住民に対してより寛容な社会の出現によって、先住民が不利な状況に置かれることなく、自由にそのアイデンティティを明らかにすることができるようになったことのみによるものではない。もちろんそのような側面があることは否定できない。しかし、より正確には、多文化主義に基づく社会の出現と同時に、先住民であることが何らかの利益を引き出す道具になったということの影響のほうが大きいだろう。だからこそ、先住民性は声高に、非先住民の目や彼らに与えるインパクトを意識して主張されるのである。無論、先住民のアイデンティティの主張の背景はこれだけではなく、筆者がインタビューしたアナやフリアのような例も存在する。彼女たちの先住民性の主張は、時代や政策の変化による、近年の特徴的なものではないが、それが非先住民に向けられたものであり、また、そのために「先住民文化」の再生産が見られる点においては、共通している。都市においては、非先住民の文脈に即した「先住民性」が主張される。彼らは、それぞれの目的のために、自らに「先住民」というラベルを貼っているのである。このように、都市の先住民には新たなアイデンティティが生まれてきており、その「先住民性」は、従来論じられてきた第一義的なものとは異なってきているのである。

彼らは、都市における新たな「先住民」である。一方、地方を中心に、古典的な意味での「先住民」も存在する。彼らは、断絶した2つの集団ではなく、相互に影響力しあう。古典的な意味での先住民は、いつでも都市先住民になりうるし、都市先住民は、再生産された文化や、都市で習得した、国民社会と対等な関係を築く術をもって、出身共同体を再構築する。都市先住民が自らに貼る、新たな「先住民」としてのラベルと、数多くの民族集団をひとまとめにして、非先住民が一方的に彼らに貼ってきた、古典的な意味での「先住民」ラベルも、同様に関連性を持つ。これまで、それぞれの民族の相違を無視して貼り付けられてきた「先住民」としてのラベルに彼ら自身が反発し、多文化主義のもとに、自らを個別の民族集団の名で呼ぼうとする動きが、しば

しば報告されてきた。つまり、押し付けられたラベルを破ろうというのである。しかし、同じく多文化主義のもと、より強大な集団となるべく、都市において民族の垣根を越えて創造された「先住民」ラベルは、同時に旧来のラベルを再強化しうる。彼らは、少なくとも表面的には、ある民族集団の一員ではなく、あえて「先住民」の一員であろうとする。彼らを、「先住民」という均一な存在とみなす旧来のラベルを利用しているのである。また、フリアや物乞いの女性の例のように、生活の糧を得るために、ステレオタイプを利用する形で貼られた「先住民」ラベルも、伝統的な（すなわち、「我々」と異なる）生活をする人々、あるいは貧しい人々という意味を込めて使われてきた、旧来の「先住民」ラベルを強化するものであろう。もちろん、フリアたちの利用するラベルが、旧来のラベルの強力な基盤に上に成り立っていることはいうまでもない。このように、新旧2つのラベルは、互いに密接な関係の上に成り立っており、両者を切り離すことはできない。

だが、数多くの民族集団に一括して「先住民」というラベルを貼り、その内部の相違に目を向けてこなかったメキシコ社会のなかで、どのくらいの人々が、彼らが新たな「先住民」というラベルを創出し、意識的に自らに貼り付けていることに気づいているだろうか。非先住民にとって、新たなラベルを自らに貼った「先住民」自体は可視的であり、それこそが彼らのラベル創出の効果である。しかし、その「ラベル」そのものは、非先住民には見えにくい。大半の非先住民にとって、「自らを先住民と呼ぶ人々」と、「先住民と呼ばれる人々」とは区別されておらず、一般的にその戦略性は認識されていないのである。

第5章　結論

本稿では、都市においてその先住民性を主張する人々のアイデンティティを対象に、その主張の背景を、非先住民に向けられた「先住民性」という概念をもって分析してきた。その結果から導かれるのは、都市における先住民性の主張は、決して原初的愛着のみによって行われるのではないということである。先住民性は、明確な目的のために、戦略的に、そして政治的に主張されるのである。その目的はさまざまであり、そのためにとられる戦略もそれぞれ異なる。しかし共通するのは、主張される先住民性が、非先住民の目を意識して再生産されたものだということである。

彼らは、それぞれ別の方向性を持ち、そのために、先住民性を構成する要素のうち、特に主張する点や否定する点を持つ。先住民によって、一方では否定された先住民性の部分が、他方では強調されるという現象が起こっている。また、一方ではメスティソ化が進行し、他方ではかつてメスティソ化した「元先住民」が先住民としてのアイデンティティを取り戻している。女性であるがゆえに教育の重要性を軽視されることへの反発や、父親への非服従、32歳という年齢で仕事と恋人を持ちながらの独身生活など、従来の先住民的な価値観を持たず、しかし同時に先住民としてのアイデンティティを持つ者もいる。多文化社会の中で、先住民のあり方もまた、多様化しているのである。

では、都市の先住民は、これからどのように変化していくのだろうか。ロスチャイルドは、民族集団がその独自性をもって、政府に何らかの要求をするとき、「政府が次第に民族政治的要求に神経質になるにつれて、民族集団はみずから、要望した政策および出力をひきだす目的で、しっかりした利益集団を組織しようとする動機にかられる」[ロスチャイルド 1989:69]と述べる。メキシコシティでも、この現象が進行している。しかし、都市における先住民運動が利益を生み、この現象が過度に進行するとき、地方の共同体との格差が広がり、その空洞化が起きないとは限らない。また一方では、先住民組織の一部の若者のように、十分な利益を受け、その目的を達成したとき、それ以上「先住民」であり続ける理由を見出せない者が、すでに現われている。利益や恩恵を求めて生み出され、取り戻され、強化されたアイデンティティは、その要求がなくなったとき、維持されることができるだろうか。

また、関根は、欧米先進諸国では、マイノリティ集団に対する多文化主義的優遇政策が、その他の国民を逆差別しているとして、多文化主義政策への反発が起こっていると述べる[関根 1999:283-286]。これは、筆者の観察する限り、メキシコでは目立った動きとしては現われていない。しかし、これはメキシコ国民が、先住民に対して寛容なのではなく、単純に、多文化主義に基づく先住民政策がその段階に達していないだけである。メキシコは階層分化が進んでおり、非先住民であっても、社会経済的に厳しい環境で生活する人々は多い。先住民問題に関しても、それは「先住民」問題ではなく、「社会経済的に低い階層に位置する農民」の問題であるとしばしば指摘される。多文化主義政策によって、先住民が十分な恩恵を受け始めたとき、同様の階層に位置する人々はどのような反応を示すのか。再び、先住民への攻撃的な反応が増加しないだろうか。そうなったとき、アナやフリアや路上で赤ん坊の人形を抱いた彼女、先住民組織を形成しない人々など、多文化主義による特別な恩恵を求めず、多くを受けなかった先住民が、負の影響を被ることにはならないだろうか。

また、サパティスタ民族解放軍（EZLN）と政府との交渉は、その蜂起から10年を経た現在においても十分な合意に至っていない。EZLN の動向は、都市で先住民性を主張する人々に大きな影響を与えるだろう。そして、それに対する非先住民の反応は、アナのような、従来の先住民像に不満を持つ人々の姿勢に影響を与えるかもしれない。このように、都市の先住民の将来に影響を与える要素は数多く、その方向性も多岐に渡る。彼らの主張が今後どう変化するのか、あるいは変化しないのか、それに対して非先住民や政府はどう反応するのか、引き続き注目していきたい。

英文サマリー

"Indigenous people" in cities and their identity:

Case studies of Mexico City

This thesis aims to analyze identity of indigenous people who have immigrated to Mexico City and emphasize their nature, even though they often suffer from discrimination and prejudice of non-indigenous people and it's easy to hide their nature and become "meztizo" (people of mixed race of whites and indigenous people) in Mexico.

First, the author mentions a successful educated woman who wears traditional costumes in the office to change the negative stereotypes (like "fool, lack of ability or education") which are held by non-indigenous people toward indigenous people. There also are people who earn their living by showing that they are indigenous people, for example, by selling "traditional" handcraft works or begging, presupposing that non-indigenous people image that they live in the traditional way or they are miserable and poor. And the notable case in recent years is that indigenous people intend to recover their own culture and tradition in a trend of the multiculturalism. They do that not only by the original attachment, but also to require some benefit from the government, because recently it proposes some policies for the sake of their welfare. For that, sometimes they reproduce or even create their "traditional culture".

In conclusion, indigenous people in cities emphasize their nature not only because the trend of multiculturalism allows them to reveal themselves, but also in order to accomplish their purposes, although they vary.

謝 辞

本稿に関する調査は、2002年6月から2003年2月の間にメキシコシティで行った。これは多くの方のご協力のもとに実現した。特に、メキシコ国立自治大学のヘラルド・チャベロ教授には、メキシコの先住民に対する新たな見方をはじめ、多大なご教授をいただき、さまざまな機会を作ってくださったことにお礼を申し上げたい。また、私のつたないスペイン語でのインタビューに快く、時には不快な記憶を呼び覚まして協力してくださったメキシコシティ在住の先住民のみなさんに深く感謝する。インタビューの場以外にも、彼らの生き方から多くのことを学ぶことができた。そして、本稿の構想・執筆に関しては、指導教官である関根久雄先生に多大なご教授をいただいた。遅筆である私を辛抱強く待ち、指導していただいたことには、深くお礼を申し上げる。また、ゼミ生である仲間からは、本稿の構想に関して多くの批判・コメントをいただき、毎週のゼミの時間の議論からは多くの刺激を受けることができた。あわせてお礼を申し上げたい。

注

(1) これは非先住民によって分類された、あくまで言語学上の区分であり、民族集団・共同体はこの数字よりさらに増加すると考えられる。共通の言語を話す複数の民族集団が存在するからである。また、このような「共通の」言語を話す集団の間ではしばしば互いの言語による意思疎通が不可能なことがあり、先住民言語の分類は時に見直しを迫られる。実際に、1990 年代半ばまでは、先住民言語は 56 であるとされていた。

(2) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ　http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(3) 梶田によると、多文化主義とは、「1 つの社会空間において複数の文化の共存を是とし、文化の共存が社会統合にもたらすプラス面を積極的に評価しようとする政策や運動」[梶田 1999:292]を指す。メキシコでは、1970 年代頃から、それまでの先住民に対する同化主義的政策が見直され、その相違と文化を認めるという、多文化主義政策が掲げられるようになった。これは、世界的な先住民復権運動の動向と関連するものであった。

(4) 1920 年代に始まった、先住民復権運動。その主要な内容は、先住民が築いた古代文明の再評価や復興と、社会的・経済的に困難な状況にあった先住民の地位・生活を向上し、その権利と尊厳を取り戻すことであった。しかし実際には、これは国民的アイデンティティの創出のための「上からの」運動であり、先住民を「メキシコ国民」とするための同化政策であった。

(4) スペイン人入植者の子孫、すなわち白人で、メキシコで生まれた者。

(6) メキシコ連邦区ホームページ　http://www.df.gob.mx/　（2003/9/20 参照）より。

(7) メキシコ政府全国地理・情報統計庁ホームページ　http://www.inegi.gob.mx/（2003/11/25 参照）より。

(8) メキシコ連邦特別区ホームページ　http://www.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(9) メキシコ政府全国地理・情報統計庁ホームページ　http://www.inegi.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(10) メキシコ連邦区社会人類学調査・高等研究センターホームページ

http://www.ciesas.edu.mx/（2003/9/25 参照）より。

(11) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(12) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(13) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(14) 全国先住民庁（Instituto Nacional Indigenista）は、2003 年 7 月 5 日より、先住民族開発全国委員会（Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas）となった。

(15) メキシコ政府全国先住民庁ホームページ http://www.ini.gob.mx/（2003/9/21 参照）より。

(16) メキシコ政府全国地理・情報統計庁ホームページ http://www.inegi.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(17) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(18) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(19) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/26 参照）より。

(20) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(21) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(22) メキシコ政府全国先住民庁ホームページ http://www.ini.gob.mx/（2003/9/21 参照）より。

(23) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(24) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(25) 諸外国からの債務返済不能による、1982年のペソ切り下げに始まった経済危機。90年代に入ると工業製品の輸出が増加し、92年にはアメリカ・カナダと北米自由貿易協定（NAFTA）を締結し、経済危機を脱した。

(26) 国立国会図書館ホームページ http://www.ndl.go.jp/（2003/12/18 参照）より。

(27) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(28) メキシコ政府全国先住民庁ホームページ http://www.ini.gob.mx/（2003/9/21 参照）より。

(29) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(30) 水を加えたとうもろこしの粉を薄く伸ばして焼いた、メキシコの主食。現在では買って食べることが多いが、彼女の住んでいた地域では、とうもろこしを粉にひいて作っていたという。

(31) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/10/27 参照）より。

(32) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/10/27 参照）より。

(33) メキシコ政府全国先住民庁ホームページ http://www.ini.gob.mx/（2003/9/21 参照）より。

(34) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

(35) メキシコ政府公平・社会開発局ホームページ http://www.equidad.df.gob.mx/（2003/9/20 参照）より。

参考文献

Bazúa R, S.

1998 *Sobre el concepto de pueblo indio o indígena. Una aproximacion al número de indígenas en el Distrito Federal.* México,D.F.:DIF-DF.

Castellanos, A.

2001 Pueblos indios, racismos y estado. In Mauricio de Maria y Campos and Georgina Sánchez (eds.), *¿Estamos unidos mexicanos?,* pp.379-401, México,D.F.: temas' de hoy.

細野昭雄

1994a 「メキシコ市の首位性拡大とその諸要因」山田睦男・細野昭雄・高橋伸夫・中川文雄編『ラテンアメリカの巨大都市——第三世界の現代文明』pp.1-7、二宮書店。

1994b 「メキシコの経済発展と都市化」山田睦男・細野昭雄・高橋伸夫・中川文雄編『ラテンアメリカの巨大都市——第三世界の現代文明』pp.8-58、二宮書店。

Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática (INEGI)

1999 *XII Censo General de Poblácion y Vivienda 2000.* México,D.F.: Tabulados de la muestra censal.

梶田孝道

1999 「多文化主義・少数民族・先住民——カナダ多文化主義が直面する新たな係争課題——」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市　人類学の新しい地平』pp.292-313、青木書店。

黒田悦子

1987 「インディオ」大貫良夫・落合一泰・国本伊代・福嶋正徳・松下洋編『ラテン・アメリカを知る事典』pp.69-72、平凡社。

1995 「先住民と国民社会」中川文雄・三田千代子編『ラテンアメリカ 人と社会』pp.195-218、新評論。

1996 『先住民ミへの静かな変容　メキシコで考える』朝日新聞社。

Lemos, R.

2003 *Póliticas públicas e identidades: Una reflexión sobre el diseño de póliticas públicas para los indígenas migrantes de la Ciudad de México.* http://www.equidad.df.gob.mx/cuerpo/indigenas/seminario/nov_rebecca_03.htm (2003/12/15 参照)。

Montemayor, C.

2000 *Los pueblos indios de México hoy.* México,D.F.: temas' de hoy.

Moreno, A.

1994 La era Virreinal. In Daniel Cosío Villegas (ed.), *Historia mínima de México,* pp.52-74, México: El Colegio de México.

中川文雄

1995 「ラテンアメリカの民族関係と人種関係」中川文雄・三田千代子編『ラテンアメリカ 人と社会』pp.171-194、新評論。

Negrete, N.

1996 *Al otro lado de la calle, Prostitución de menores en la Merced.* México.:CDHDF, EDIAC y UNICEF.

落合一泰

1984 「民族と文化」増田義郎・山田善郎・染田秀藤編『ラテンアメリカ世界—その歴史と文化—』pp.231-245、世界思想社。

Oehmichen, C.

2003 *La multiculturalidad de la Cuidad de México y los Derechos Indígenas.* http://www.equidad.df.gob.mx/cuerpo/indigenas/seminario/mar03.htm (2003/9/21 参照)。

ロスチャイルド、J

1989 『エスノポリティクス——民族の新時代——」内山秀夫訳、三省堂。(Joseph Rothschild, 1981, Ethnopolitics: *A Concept Framework.* New York: Colombia University Press.)

Sánchez, C.

2002 *La diversidad Cultural en la Cuidad de México: derechos de los pueblos indígenas originarios y migrantes.*

http://www.equidad.df.gob.mx/cuerpo/indigenas/seminario/diversidad.htm
(2003/10/15 参照)。

関根政美

1999 「グローバル化時代の都市先住民」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市　人類学の新しい地平』pp.273-291、青木書店。

スタベンハーゲン、R

1981 『開発と農民社会』山崎春成・原田金一郎・青木芳夫訳、岩波書店。(Rodolfo Stavenhagen, 1981, *Peasant societies and development.*)

高山智博

1987 「メキシコ」大貫良夫・落合一泰・国本伊代・福嶋正徳・松下洋編『ラテン・アメリカを知る事典』pp.419-433、平凡社。

1999 「メキシコ 1994 年—NAFTA と EZLN—」アンドラーデ、G.・堀坂浩太郎編『変動するラテンアメリカ社会—失われた 10 年を再考する—』pp.61-83、彩流社。

恒川惠市

1996 『アメリカ論Ⅱ』財団法人 放送大学教育振興会。

山崎春成

1987 「世界の大都市③メキシコシティ」東京大学出版会。

Yanes, P.

2002 *Urbanización de los pueblos indígenas y etnización de las ciudades: hacia una agenda de derechos y políticas públicas.*
http://www.equidad.df.gob.mx/cuerpo/indigenas/seminario/politica.htm
(2003/9/20 参照)。